

学友会 (関西)



1990

Dedicated To International Peace and
International Understanding



YO NE YA MA 6・7

目 次

あけぼの	魏 栢 良	1
米山奨学会への期待	戸 田 孝	2
米山奨学事業の歴史	種 田 憲 次	3
ドイツ青年MAX君との出会い	伊 瀬 芳 吉	5
国際親善も着眼大局、着手小局が要諦なり。	伊 藤 恭 一	6
地区大会のシンポジウム	武 尾 敬 之 助	7
「私の紹介したい日本」	井 口 廣 昭	8
相互の理解のために	山 中 均 之	10
国際親善に役立つ話し	木 村 英 一	11
文豪谷崎潤一郎の生い立ち	市 居 嘉 雄	12
米山記念奨学生とカウンセラーを経験して	重 光 世 洋	15
「学友会創立5年目を迎えて」	文 燕 友	18
少しずつ成熟していく米山奨学生学友会(関西)への期待	黄 承 國	19
日本の留学生政策の問題	DILEEP CHANDRALAL	21
台湾における外資系広告会社の進出と文化摩擦	大 塚 賢 龍	23
旅 情	千 文 奉	25
池田のおばさんのこと	許 紫 芬	27
日韓祝日の比較	喪 貞 烈	30
日本社会の特殊性ー中国社会と比較してー	林 珠 雪	32
ニューヨークで出会った若者達の夢	金 美 貞	35
四年目の日本留学にて	李 幸 輔	36
「ハンブル」とは	鄭 錫 賢	38
ほしいけれどもできないのか	洪 徳 俊	40
「二つの提案」	韓 三 建	41
日本現代工芸の随想	張 国 清	43
日本と韓国の産業技術に関する一言	崔 桓	45
中国人の私にとっての日本語の発音に関する難点	蕭 春 運	47
なぜこの女が建築をやっている?	齊 慧 芸	50
私の専攻ー21世紀に向かう宇宙開発ー	崔 慶 昊	52
BAHALANA!	Cynthia Muncada	55
(第22回KIC留学生と世界を語る会)トルコにおける政教分離	Kamil A Toplamoglu	57
中高年者の健康と運動	金 炫 秀	60
米山奨学生学友会OBとのINTERVIEWおよび紹介	黄 承 國	62
韓国ロータリー米山記念奨学学友会について		65
韓国ロータリー米山記念奨学学友会の設立に 力になった前R. I. 理事を訪ねて		66
米山奨学生学友会(関西)総会報告	石 若 一	67
なぜ、私は教育学を選じたか	蔡 昭 慧	68
米山奨学生学友会(関西)の1990年度活動報告		69
NEWS		70
米山奨学生学友会(関西)会則		71
米山奨学生学友会(関西)細則		75
米山奨学生学友会会則「各大学代表」についての細則		76
会計収支決算報告書		77
米山奨学生学友会(関西)役員名簿		78
米山奨学生学友会(関西)各大学の代表		79
編集後記		80

○表紙について:表紙を頼まれて少し戸惑いましたが、米山奨学生の時に学んだロータリーの精神が意外と表紙のイメージを作るのに役立ちました。

私達、若者が世界のどこでも国境なしに羽ばたき自由に考えることができるような望みを抱いて表紙を作りました。

米山奨学生学友会(関西)副幹事 金 美貞(京都市立芸術大学美術研究科写真専攻)

○挿絵について:韓国の美大で西洋画を専攻されました姜 京希さんの作品です。米山奨学生学友会OBの劉 泰均氏のご夫人でもあります。ご協力ありがとうございます。



あけぼの

米山奨学生学友会（関西）

会長 魏 栢 良

(W i B a c k - L a n g)

夜がほのぼのと明ける頃、赤く染まった山々の峰から、丸い顔の太陽が顔を出し、今日一日の旅の始まりを告げる。早朝の静けさに深みを与える虫の鳴声に誘われて、窓を開ける。体内の隅々に新鮮な空気を取り入れる。すると自分の内部にもあけぼのの光が差し込む。

そんな韓国の朝の風景が私の心の奥底に深く沈んでいる。しかしあけぼのの風景というもののはどの国においても美しい。一日をこのような荘厳で清い気持ちで始めようという神の意図さえ感じられる。

今日の世界の状況を考える時、今あけぼのの兆しが見えてきているのではないかと思う。

数十年間にわたる東西の対立、南北間の経済のアンバランス、政治・経済の二極集中といった大問題が、相当の難問が残されているとはいえ、大筋として解決に向けての対話の努力が図られている。私の祖国の南北問題でいえば、先日ピョンヤンとソウルで行われたサッカー交流競技をテレビで観戦した際に感じられた民族の一体感である。つい数年前までは考えられなかったことが、少しずつ実現し始めている。

さて我々の学友会にもほんのりとしたあけぼのの兆しが見えてきた。学友会全般の活動は勿論のこと、特に学友会会報において光が差し込み始めたように思う。当初会報の出版に関する経費が非常に苦しい状況であったが、大阪大淀ロータリアンの方々のご協力により、ご支援の輪が広がりつつある。これは何よりの恵みであり、学友会に差し込んだあけぼのの光である。このロータリアンの方々へ心からお礼を申し上げますと同時に、この光が炎となって燃えさかることを祈っている。

この会報の創刊の目的は真の国際理解と国際交流を深めることである。同じ地球上に生きる人間としての協力体制の確立に貢献するための意見の広場である。

来日している我々会員は各自の母国で教育をうけ、それぞれの専門分野に専念している者である。それぞれの背景も知識も異なる我々がこの日本で巡り合い、相互に意見を表現し、交換し、理解しあうということの意味の深さを、ここでもう一度確認したい。

また日本の各方面において指導的立場にいらっしゃるロータリアンの御寄稿に接することができるということは、さらに真価を高める。

タテ社会の関係に基づくものでなく、互いに対等な立場で語り合えることが相互交流につながる。学友会の究極の目的である「真の相互理解」と「友情の結実」という二つの使命の達成に向けて、今差し込むあけぼのの光を見失うことのないよう、心に刻んで、新たな一歩を踏みだしましょう。

米山奨学会への期待

(財)ロータリー米山記念奨学会

学友会委員長 戸田 孝

D. 266 バストガバナ

世の中には人の為になる良いことをしようと思う人は沢山いるのですが、いつ、どんなことを、どのように行えばよいか思いつかないままに日を過しているというのが実情のようです。世界の尊敬の的となっているシュバイツァー博士の献身的な奉仕に感銘を受けた多くの医師や看護婦の発展途上国や極貧の地で使命感に燃える奉仕を続けている人々をみると、その超人的な奉仕に万人が感動をおぼえます。私達には、とても思いも及ばない奉仕活動です。「人それぞれの生活の中で、日常生活の営みを続けながら、自己を高め、世の人の為に盡すことができなだろうか？」このような善を行いたいと思う人々にポール・ハリスはロータリーをこの世におくりました。85年を経て、168の国、地域に25,000RC、110万人を超える善意の拡がりを見せ、多くの善行の実践がなされたことを知る時、無償の善行が、多くの共感をえていかに大きく成長するかに驚嘆をおぼえるのです。これは世界中のRCの幾千万という現在及び過去の会員達の集団的考えと辛苦の努力によって形成された集積であり、会員1人1人の意欲的参加によるものであるといえるでしょう。

この偉大な社会改善運動の一環として日本にはじめてRCを創立した米山梅吉先生の偉徳を顕彰する為に設立された米山奨学制度は、日本独自の得難い奉仕事業として、外国よりの留学生の方々のために、各RC、R t nの物心両面にわたる献身的な努力によって発展してきたのです。世界の中でも日本の役割が云々される中、国際理解と親善により平和をめざす日本のロータリーにとって米山奨学制度の果す役目はとても大きいものがあります。「世の中に何かよいことを」と願うR t n. に米山奨学会に意欲的に参加することで未来の輝かしい世界の為に盡す具体的な活動となることを信じてみましょう。

- 平和への想いをこめて温かいご寄付を
- 世話クラブ、米山カウンセラーとして温かいお世話を
- 心のふれ合いを通して国際親善、文化交流をお願いするものであります。

1982～83年度日本から選ばれた向笠広次R I会長は「人類は発生の源流へ遡れば、みな親戚なのです。美しい音楽、感動的な文学はどの民族にも感動を与え、感銘深い奉仕や、感激的な話には人を動かす力を持っているし、これは老若の年齢をも越えるものであります…」

私達は若い奨学生諸君と話合う機会をもっています。指導的立場にあるR t n. は次代の世界を担う各国の若者と日本語で豊かな体験に基く感動的な話や人生訓や、奉仕の歓びなどを語り伝えて頂きたいのです。米山制度の良さはここにあると思います。「四つのテスト」を創った第50代R. I会長ハーバート・J・テラー氏は「ロータリーとは友情を育み、人と社会を作り、世界各国の人々の間に善意と友情を芽ばえさせる団体である」「若者に向かって話をするには有意義である。彼らの中に潜む素晴らしい可能性に驚かざるを得ない」と語っています。

ロータリーを通じ、米山奨学制度を通じて次代につがれる善意の集積に期待するものであります。

米山奨学事業の歴史

(財)ロータリー米山記念奨学会

常務理事 種田 憲次

D. 266 パストガバナ

米山奨学事業は、歴史的には4段階に分けられる。

- (1) 東京RCの米山基金時代 (1952年11月～1956年11月)
- (2) 米山奨学委員会時代 (1956年12月～1962年11月)
- (3) 米山奨学会時代 (1962年12月～1967年6月)
- (4) ロータリー米山記念奨学会時代 (1967年7月～)

(1) 東京RCの米山基金

ロータリーの創始者ポール・P・ハリスは、1947年1月27日に逝去した。ポール・P・ハリスを記念して何か事業をとの声が、ロータリー世界の隅々から起り、その結果としてロータリー財団の国際奨学制度が生まれた。

東京RCの創立者米山梅吉翁が生前、東南アジアとの親善に強い関心があったことを想起した人々によって、その地域を主たる対象として米山基金が設定されることになった。ロータリー財団の奨学制度が手本とされ1952年11月に東京RCは米山基金の設定を発表した。

アジア地域のロータリー所在国から優秀な学生を招いて日本で勉学の機会を与えると共に国際理解と親善を計ることとして、奨学金の期間は2年、毎年2名、その費用は1名年間50万円の予算であった。

基金は、1953年4月に開始され2年連続の寄付として、会員1名千円以上、会員関係会社から1口1万円以上、総額220万円が拠金目標であった。

東京RCのこの国際事業は、米山奨学金とよばれ、又米山ファンドと通称された。

タイのバンコックRCとビルマのラングーンRCに奨学生推薦の依頼状が出された。

タイからは、ソムチャード・ラタナチャタ君(カセサルト農業大学卒)が1954年9月来日し、東京大学農学部養蚕学科で勉学し1958年10月まで続いた。この間バンコックRCから協力費として約20万円が送られてきた。

しかしラングーンRCからはなかなか回答が得られず、同RC会員のチャテルジ地区ガバナーをも動かして、漸くパトリック・ジョージ君の推薦があったが、来日は遂に実現せずに終わった。

ビルマからの奨学生招致の失敗から今日のロータリー米山記念奨学制度が生まれたとも言えるのである。即ち、こうして生じた余剰を在日留学生の奨学金に転用することが出来たのである。そして在日留学生を奨学金支給の対象とすることの利点を発見したのである。もし、当時、海外から2名を招致していたならば、同じ様な制度が続けられ、今日の如く多数の米山奨学生を採用する制度は実現しなかったかも知れない。

そうした折に現れたのがインドからの留学生イーベン君(東京大学農学部水産資源学科)である。インド・ナジャコイルRC会長からの推薦もあり、1955年1月から奨学金を出すことに決定した。

イーベン君の採用は米山奨学制度に転機をもたらした。選考の手続も簡単であり確実で

もある。修業年限もはっきりしているから予算も立てやすい。こうした利点が分かったと共に、在日留学生の中に、同様に奨学金を求めている者が多数にあることを知ったのである。

イーベン君の奨学期間は2年余に及び、1957年5月に終了した。

イーベン君の友人ロイ君（東京大学農学部学部生、水産物加工・冷凍研究）の本国政府の援助が突然中断し、留学を中断して帰国一步手前にあったものに、1年間米山奨学生として奨学金を支給し、無事学位を取得することができた。ロイ君は、修士課程に進学を希望したが、東京RCの米山基金は涸渇し、ロイ君の希望には報いらなかった。

この3人の奨学生によって、東京RCの米山基金は、立派な成果を挙げて終結、当時、既に活動を開始していた米山奨学委員会にすべてを継承して発展的解消を遂げた。



ドイツ青年MAX君との出会い

(財)ロータリー米山記念奨学会

監事 伊瀬 芳吉

D. 266 パストガバナ

ご承知のように1905年米国で誕生したロータリーは1990年7月16日現在172の国家及び地域に広められ会員総数1,106,856人うち日本の会員数は11万5千人近くになっている。ロータリーの奉仕活動の一つに国際奉仕部門があり、青少年交換とか世界社会奉仕活動を行っている。表題のMAX君は18歳の時青少年交換学生として1988年来日、ロータリアンの家庭でお世話になり乍ら高校に通っていた。1年の滞在後は帰国直前大阪地区として“さよならパーティー”を開催、交換学生から先に日本語で挨拶して貰う事が慣例になっている。

1989年の“さよならパーティー”でMAX君と話し合っていたら離日迄に生産工場を見学したいとの話でダイハツ池田工場の見学をして貰った。帰国時日本提燈をお土産に欲しいとか富士登山を是非実行したい等の話があった。そこで富士山頂から私宛ハガキを出しなさい。受取ったら提燈を持って見送り旁々大阪空港に行き手渡してあげると約束した。打合せ通りハガキが届いたので1989年8月8日空港へ見送りに行き提燈を手渡した。その後彼から手紙が届いた。素晴らしい内容で僅か1年の日本滞在でこんな日本語の手紙が書けるようになった努力に頭の下がる思いがした。MAX MARTIN KAHRs君の手紙をそのまま記して参考に供したい。

こんにちは、お元気ですか？お手紙どうもありがとうございました。今年8月8日に空港までお見送りにいらっしゃって下さった事を感謝したいと思います。とても嬉しかったです。提燈もありがとうございました。ダイハツの工場を見学するのがとても面白かったです。1年振りに帰ったドイツはあまり変わっていませんでした。でも私の方は大きく変わったと思います。まずドイツ語に慣れなければなりません。第2に日本では大人になりましたので自由と責任が益々沢山あります。

明日車の免許の為の試験を受けます。車が大好きなので心配はしておりません。こちらの学校が8月31日から始まりました。もうすぐ受験生になりますので一生懸命勉強に頑張っております。特に物理と数学と化学ではいい点数を取らなければなりません。クラブではコンピューターと建築と卓球とアマチュア無線に入っております。暇な時ちょっとアルバイトして金を溜めて日本語を忘れない為に自分の無線機械で日本人としゃべりたいと思います。多分今度学生代表者に選ばれます。それではお身体どうぞ大切にお過ごしになって下さい。(マックス・マーティン・カース)

以上

国際親善も着眼大局、 着手小局が要諦なり。

大阪R.C. 伊藤 恭 一

D. 266 パストガバナ

最近THINK GLOBALLY, ACT LOCALLYという言葉がよく使われている。何事を企画し行動するにも昔から「着眼大局、着手小局」という名言は味わうべきものである。

国際理解や国際親善には特に前記の言葉が大切であります。先年西独大統領ワイゼッカーが東欧問題に関する発言の内容は今も心に残っている。私の記憶では「独乙人全員は過去に責任を負わねばならない。過去に目を閉ざす者は今日にも盲目になる」という言葉であった。ロータリアンを含め日本人は過去に目を閉ざし、目先を糊塗し勝ちである。

米山奨学生学友会の諸君の大半は韓国、台湾の方々であり、ロータリアンでさえ過去の歴史を避けて通ろうとするし、奨学生学友会の諸君もこの問題を進んで発言をすることを好まなかったと推測する。

前世紀の後半より今世紀の前半のアジアの問題、更に極東の情勢を正確に記述されているものの少ないのは残念である。阿片戦争、欧米諸国による各都市の租借地（租界）問題、対日三国干渉問題、国際連盟によるリットンレポートの影響、日本の国連脱退前後、上下、左右より史実を明確にすることが肝要である。勝者の理論には必ず隠された内容が存在することは私の76年の人生に於て体得したものである。例えばソビエトに戦火を交えたヒトラーは執拗に同盟国である日本に背後よりソビエトを攻撃する要請を断乎として拒否した日本の軍部の英知を知る必要がある。にも拘らずソビエトは1945年8月6日米機エノラゲイ号より投下されたリトルボーイによる広島島の惨事より3日後に、宣戦布告に等しい通告後僅かに2時間後にしてソ満国境を大軍をもって突破したソビエトの存在を忘却すべきでない。

しかし、何事も一抛に、全面的な理解を求めることは困難であるが、個別的な理解を積み重ねることは国際理解の要諦である。

敢えてこの問題を取り上げたのも国際理解の虚像を実像に替える必要を痛感するからである。私は一予備役航空将校として7年7ヶ月も応召し、而も生を長らえた所以は情報将校として特別の情報源を確保し得たからである。

韓国出身の学友会会員に特に理解してほしいことは今私が「李方子さま追悼募金」を行い、李方子さまが生前慈行会の総裁として心身障害児の教育に盡粹され、保護作業所施設の建設に心を残して1989年4月30日逝去されたが、この施設の建設費の一部を献金する運動中である。韓国の某紙は李方子さまを評して「自らの不幸な人生を社会活動への献身で美しい人生に変えた」という一文を理解して頂きたい。寸足らずの一文であるが制限字数に達したので、諸君の発展と健康を願いつつ攔筆する。(以上)

地区大会のシンポジウム

武尾 敬之助

D. 266 パストガバナ

3月16日R I 第266地区大会のシンポジウムはパネリストとして、米山学友の文燕友、許紫芬、米山奨学生の李淳哲、朱廣興、石若一の5氏のパネルディスカッションであった。各氏の発言は前以って十分に準備されたもので、テーマ「米山奨学生からみた日本」に満堂のロータリアンは深い感銘を受けた。

文さんは関西米山学友にロータリアンとの交流について「ロータリアンの家庭に招かれたことがあるか」とアンケートした所、全体115名、回答83名の中で40.2%が「1回もない」という答であった。カウンセラー制度に奨学生は感謝しているが交流という面では今1つという感がするとの所見であった。ロータリアンとしても一考に値いする数字と思われる。

許さんは5年も米山奨学に挑戦してやっと合格した。そして世話クラブの全ロータリアンの親切に恵まれた。彼女は「いま迄の人生で一番嬉しかったことは何でしょう」と聞かれたら「私は幸いにも米山奨学生に選ばれたことです」と答えるでしょう。2年間充実した生活をして日本人の暖い心を米山奨学を通じて体験したと述べている。これが本当のロータリアンの姿だと私は世話クラブの方々に敬意を表する次第である。

李君は米山奨学生になって精神的にも経済的にも安定をえたこと、更に素晴らしいことは学会出席に補助が出ること。海外での学会論文発表にも15万円の餞別が出て感激したことを話してくれた。

朱君は幾つかの実例をあげて、風俗習慣や発想の違いによる国際理解の難しさについて述べ、人間とは不思議なもので相互理解をするためには時間がかかるけれども、誤解するには余り時間がかからないようだと言った。奨学生の周辺の気配りに考えさせられるものがあった。

又彼は米山奨学生受験に際してロータリアンの推薦書を貰う苦心について述べたが、奨学会としては、その推薦書の有無は全く試験の可否には関係なく、合格者の世話クラブの選定などの参考に供するだけである。米山学友の諸君は後輩の受験者にその旨よく伝えてほしいものである。

石君はきびしい競争の中、米山奨学生に合格した中国留学生の1人である。彼は身体障害児等の白浜招待旅行に参加してロータリアンと共に障害児らの世話をしたときの奉仕の感激と、ロータリークラブ例会に出席して、ロータリアンと同様に誕生日を祝って頂いたことに対する感謝の気持ちを述べた。社会制度が異なる国の学生も人間性に変りはないものとしみじみ感じた次第である。

以上は5氏の発言の一部である。尚、司会、古市会員、永野米山地区委員長の話及びフロアからの戸田、中西両PGのお話は割愛させて頂いた。

「私の紹介したい日本」

264地区米山奨学会委員長 井口 廣 昭

日本の名所といえば各地に神社寺院が数多く見られます。これらの一つ一つが見る者に何らかの感銘を与えてくれるものであると確信いたしますが、留学生の皆様には、「日本人」を見ていただきたいと思います。

大多数の皆様は大都会とその周辺で生活し、通学しているわけですが、日本全体が大都市への人口集中と地方の過疎化が急速に進んでおります。

地方にはそれぞれの地方の特色があり、美しい景色と素朴な人情があふれております。

この過疎化の中をJR（旧日本国有鉄道）より切りはなされたローカル鉄道が細々としかし懸命に生きながらえようと企業努力を続けながら走りつづけております。新幹線が日本の大都会を象徴しているとするなら、さしずめこれらのローカル鉄道（現在は第3セクターと呼ばれている）は、地方の代表のようです。

それぞれの鉄道の特色ある車内には、地方の方言が飛びかい、地方の人情のあたたかさが満ちあふれております。数多くの第3セクターの鉄道の中から幾つかを御紹介いたします。

- ① 北海道ちほく高原鉄道 池田－北見間140.0km北海道唯一の第3セクター鉄道。「星と銀河」をこの鉄道のシンボルとして、雄大な北海道の内陸を走る。沿線では「ふるさと銀河線振興会議」を結成して鉄道の利用促進と意識向上につとめている。
- ② 三陸鉄道南リアス線 岩手県釜石－盛岡間36.6km 北リアス線岩手県宮古－久慈間71.0km。陸の孤島とまで言われていた三陸海岸を結ぶ日本で初の第3セクターの鉄道として生まれ、大変な企業努力で黒字化。日本のモデルケースとなった。沿線には風光明媚な三陸海岸や漁業で有名な宮古、鉄の町釜石などがある。
- ③ 秋田内陸縦貫鉄道秋田県角館－阿二合間94.2km秋田県の内陸部を走る鉄道で日本で初めて女性運転士が登場した鉄道。車内一部は応接室のソファのような仕様になっており、コミュニケーションを計るには絶好であるが、秋田の方言は難しいかもしれない。
- ④ 樽見鉄道大垣－樽見間34.5km国指定天然記念物「淡墨桜（うすずみざくら）」を始め多くの観光資源を持つ中部地方のローカル線親桜のシーズンがベスト。
- ⑤ 土佐くろしお鉄道窪川－中村間43.0km黒潮おどる雄大な南国土佐の海辺と日本一と言われる清流の四万十川沿いの中村市まで。四国唯一の第3セクター鉄道
- ⑥ 平成筑豊鉄道 直方－田川伊田間16.1km行橋－田川伊田間26.3km金田－田川後藤寺間6.8kmかつての石炭の宝庫筑豊炭田の真っ只中を走り沿線には荒れはてたボタ山が点在する。北九州福岡都市圏の広がり、大都市型の人口が増加している。
- ⑦ 高千穂鉄道 宮崎県延岡－高千穂間50.0km五ヶ瀬川の深い峡谷沿いに、「日本の神話のふるさと」と言われる高千穂へ、天ノ岩戸も沿線にあり、車内ではビデオによる沿線観光案内が放映されている。地元の人のナマの神話が聞けるかも知れない。以上、

日本で33社ある第3セクターの中からいくつかを紹介しました。皆様もぜひ地方の風景と人々を見聞してください。なお小文作成にあたり「第3セクター鉄道（鉄道ジャーナル社発行）」を参考にいたしました。





相互の理解のために

268地区米山奨学会委員長 山中均之

甲南大学経営学部教授（伊丹有明R. C）

新聞でよく「大店法問題」についての記事を御覧になることが多いのではないかと思います。これは日本における流通問題について、大型店の出店を調整するための法律です。私は流通問題を専門に研究しているものですが、この問題に長い間たずさわってきて、つくづく思うのは、そこでなされる調整のやり方は、外からみて理解しにくいのではないかということです。この法律は、大型店が出店する場合には、その届出を義務づけております。しかし、その前に、一番影響をうける地元商業者の了解をえなければ届出は、なかなか受理されません。そのために、事前の会合が開かれます。しかし、事前の会合のために、また事前の説明がいります。要するに、これは日本の社会でいう「根回し」ということです。従って、正式な会合はわずかの回数しか開かれず、その前に繰返し、繰返し、事前の会合が開かれることになるわけです。そこでは、ある客観的な基準にもとずいてある討議がとことんまで行なわれるわけではありません。このことに関しては、私などはいつも、流通問題の研究者として、いらいらしているのですが、利害関係者の双方の結局は力関係で、ある妥協点を見出し、届け出るという仕組になっております。

このようなやり方が日本の社会には存在しております。それはそれなりに、調整の機能を果たしてきています。困った中小商業者がこれによってプラスの影響を受けたことは確かです。これは外から見て、不可解なことかもしれません。しかし、日本では、いろいろなことをきめていく場合に、大なり小なり、こういったやり方が多いのではないかと思います。良い、悪いの問題ではありません。これは、私たち日本での生活の仕組の問題であります。それぞれの国の文化の違いを誰も裁くことはできません。

今や、ボーダーレスの時代に入りました。もちろん、私達は今までやってきたことが全部いいとは思っておりません。国際社会において通用するように、改めなければならないことが、沢山あります。しかし、その前に相互にそれぞれの生活の仕組を理解し、その上に、相互に納得できるやり方を見出すことが、共存共栄の実をあげ、国際平和をつくり出す重要な課題であると思います。日本で生活された米山奨学生の諸君に、特にこのことを訴えたいのです。

国際親善に役立つ話し

住吉R. C. 木村英一

大阪市立大学名誉教授（元学長）

米山奨学生関西学友会の皆さん、日頃は住み馴れた国を離れ、温かい家庭と別れ、言語、生活様式、風俗習慣、価値観、食物など異なる他国で、勉学を続け、定めし御苦勞の多いことと、思います。併し、国際親善を願う米山奨学金を受けて居られる皆さんは、親善の懸け橋を渡る代表選手として、将来の貢献が期待されて居ります。

親善と口で唱えることは易く、実現は容易ではありません。人間の脳のはたらきに、理性と感情があり、理性では明白なことも、感情が壁となって行動が抑制されることがあります。感情は、心とも表現されますが、心の壁が親善の仇となります。

最近、堅く東西を隔てていたベルリンの壁が除かれ、続いてドイツが統一されました。

同様に、先づ心の壁を除くことが、国際親善に役立つことと思います。

心の壁は、相互理解の不足、不信、誤解から生ずるもので、これを除く第一歩は、本音で話し合い、お互いを知ることだと思えます。

1989-90年度国際ロータリー第266地区大会シンポジウムの「米山奨学生からみた日本」で、米山奨学生学友会と現奨学生パネリストが率直に訴えられた話題は、ロータリアンに深い感銘を与え、国際親善のよき糧になったと思えます。

残念ながら、日本は欧米先進国に比べて、圧倒的に留学生対策が貧弱で、今後、努力を注がねばなりません。経済的援助や施設の充実も、さることながら、心の交いを大切に、留学生皆さんに魅力のある国になりたいと願っております。

日本は、廃虚と窮乏から立ち上り、物質的には豊かな国となりましたが、曾て近隣諸国に多大な迷惑をかけた罪ほろぼしに、将来、それぞれの国の発展と繁栄を担う留学生に、出来る限りの援助をせねばなりません。

国際奉仕を志すロータリアンはもちろん、一般市民も理解を深め温く受け入れることを切望して居ります。私も米山奨学生のカウンセラーを経験しましたが、六年間日本に滞在した奨学生の別れに述べた言葉が今尚耳に残ります。

「日本に留学中、至る所、どの日本人もとても親切でした。併し、学友の一人も、家に招いてくれた人はありません。ほんとうに、心を打ち明けて、何でも話せる友は一人も居りませんでした。淋しかったです。」

一般に日本人は仲間意識が強く、よく団結するが、排他的で、友なき国であり、将来孤立する恐れがあると批判されます。また、外国、特に東南アジアに関する知識が乏しく認識が足りません。個人的に、悪意はないのですが、家族的なお付合を避ける傾向があります。併し、一度交際すれば、忽ち心の壁が消えて、親善を深める人々も沢山居ります。

心の壁は、叩けば開かれるのです。

米山奨学生の皆さん、ロータリアンや一般市民にも、機会ある毎に、積極的に、気軽に話しかければ、必ず親善の輪が広がり、心許せる親友も得られることと思えます。



文豪谷崎潤一郎の生い立ち

西宮R. C. 市居嘉雄

アメリカの週刊誌『タイム』は、1965年（昭和40年）8月6日号の死亡欄に、同年7月30日に世を去った谷崎潤一郎について、次のような記事を載せた。

—谷崎潤一郎、79歳、心臓麻痺、日本の湯河原で死去。日本文学界の長老（『鍵』、『細雪』などの作者）、東京の米問屋の息子。女性に喜んで隷属した男性を描いたセックスと結婚についての119篇の小説ゆえに、東洋のD. H. ローレンスとして知られた。—

現在日本文学の巨匠であり、アメリカ・アカデミー名誉会員で、またノーベル文学賞の有力候補でもあった潤一郎について、上記の記事には多少の誤解はあるものの、とにかく潤一郎の諸作品は早くから英・米・独・仏などの各国で訳され、また内外で映画化されてきた。

そこで、私は潤一郎がどのような幼少時代を過ごしたのか、その生い立ちについて述べてみたい。幼少時代の記憶や体験などが、その後の人生に大きく投影していると思うからである。潤一郎自身も、「今日に至って振り返って見ると余人は知らず、私の場合は、現在自分が持っているものの大部分が、案外幼少時代に既に悉く芽生えていたのであって、青年時代以後に於いてほんとうに身についたものは、そんなに沢山はないような気がするのである」と述べている。

潤一郎は、1886年（明治19年）7月24日、東京市日本橋蛸殻町（現、中央区日本橋芳町）で、父倉五郎、母は関の次男に生まれた。父は婿養子で、米穀取引所仲買人や印刷業などを営んだ。潤一郎は裕福な家庭で、兄が夭折したため長男として、ぜいたくに我がまま一杯に育てられた。

祖父の久右衛門は外灯点灯業や洋酒店などを手広く商っていた。家は代々日蓮宗でありながら、祖父だけがキリスト教ニコライ派に改宗した。マリアの姿を眼差に、「西洋の国の女神の前に掌を合わす祖父の心持がぼんやりと理解出来て…」と述懐し、潤一郎が女性崇拜の傾向となった遠因として自ら認めているのである。

次に母親の関のこと。明治時代、東京の下町で器量よしと云われた娘達は、一枚刷りの錦絵にされたものだが、潤一郎の母関は美人絵双紙の大関にされたほどであった。『幼少時代』の中で、「私はよく、母が美人に見えるのは子の欲目ではないか知らん……とそう思い思いました。顔ばかりでなく、大腿部の辺の肌が素晴らしく白く肌理が細かだったので、一緒に風呂に這入っていて思わずハッとして見直したこともたびたびであった。」と書いているように、母が美人であったことは大変得意であっただけでなく、いわゆる“母恋い”が谷崎文学の最も重要な要素となるのである。ついでに付け加えれば、潤一郎の地震嫌いは母親の影響が大きい。

友人の笹沼源之助についても触れなければならぬ。彼は潤一郎と同じ幼稚園に通っていたが、互いに意識したのは小学一年のときである。笹沼家は偕楽園という東京で最初の高級中華料理店で、日本橋区亀嶋町にあった。潤一郎は頻りに笹沼の家に遊びに行ったので、

思い出深い存在となった。1923年の関東大震災から潤一郎が関西に永住するようになり、その数年後に本山村岡本梅ヶ谷（現、神戸市東灘区）の農家を買取り、敷地内に自らの設計で別棟を新築した。それは中国風とも僧堂ともいえる奇妙な建物で、偕楽園を建てた宮大工が築造に当たったといわれる。更に、1918年朝鮮満州をへて中国大陸へ、1926年にも再び中国へ旅し、田漢、郭沫若、歐陽予備ら中国文化人との交遊、中国家具の購入なども、案外その根源は偕楽園につながるのではないかという気がする。

幼少時代の家庭環境で、もう一つ忘れてならないのは父親の事業失敗である。手腕があった祖父と違って、婿養子の父は事業に次々と失敗して家計が窮迫したため、東京市内で何度も転居を余儀なくされた。それが潤一郎が関西に移住してから後、10数回も転居を繰返した遠因の一つとも考えられる。

そのほか、幼少時代にたびたび母や祖母、叔父叔母たちに連れられて歌舞伎見物へ出かけたことが、後年の人間形成に測り知れない感化を与えた。

最後に、潤一郎の小学校当時の恩師についてである。潤一郎の人生に大きな役割を持ったのは、尋常科担任の野川先生と、高等科担任の稲葉先生である（注一当時の小学校は尋常科4年に高等科4年）。尋常2年のとき、漢詩めいたものを作って野川先生に見せたというから、いささか早熟なのに驚くが、先生に「もう少し勉強したらよいだろう」といわれたという。遠足のとき、九代目市川団十郎の歌碑を読んでくれたのもこの先生で、のち潤一郎が和歌に親しむきっかけとなった。また稲葉先生は潤一郎の文学への興味を育て、家計の窮迫で進学をためらう潤一郎に府立一中（今の日比谷高校）への進学を強く推進してくれた。英語も最初稲葉先生から教えられた（傍ら英語塾と漢文塾へかよった。）

一中に入学できた潤一郎はずば抜けた秀才ぶりを発揮して、学年を一つ飛び越えて進級した。一中の「学友会雑誌」に掲載された論文は、全校生の注目を浴びたという。旧制一高の英文科に入学すると文芸部委員となった。それが東大の国文科に入ったのは、最も自信がある学科であり、学校を怠けるのに都合がよいとの考えによる。しかし、強度の神経衰弱となったため、友人笹沼の別荘へ転地療養し、健康が回復するや小説家を志して創作に励んだが、反響は無かった。潤一郎の一生で一番暗かった時代である。

1910年（明治43年）秋、第2次「新思潮」が創刊され、潤一郎も同人となって毎号寄稿したが、翌年廃刊になると、「スバル」の同人となった。その頃、授業料未納のため東大を中退せざるをえなくなった。ところが間もなく、慶応義塾大学の教授となっていた永井荷風が、「三田文学」誌上に新作家谷崎潤一郎を激賞する評論を発表したため、25歳の潤一郎の文壇登場は決定的事実となった。その後、潤一郎の作家活動は殆ど休むことなく、最晩年まで続くのである。

終







米山記念奨学生と カウンセラーを経験して

米山奨学生学友会（関西）

直前会長 **重光世洋**

大阪産業大学工学部教授

1959年4月27日ノースウエストの4発プロペラ機で台北松山空港から沖縄の那覇を経由して夕刻に東京羽田国際空港に降り立ってから、もうはや31年の歳月が「浮生は恰も似たり氷底の水、日夜東に流るるは人知らず」の如く、あっという間に経ってしまいました。その日にはなぜか「君の名は」や「有楽町で逢いましょう」という映画で有名になった数寄屋橋や喫茶店を思い出し、急いで現場に足を運んだ。夜行列車の中でかつて母国で見た映画の内容と今日の出来事を追憶しながら大阪へ向った。

当時のJR大阪駅は戦争の痕跡が生々しく、駅舎は墨一色で塗りつぶされ、構内の至る処には戦傷者の痛ましい姿が目に入り、一瞬私は一体何処にいるかと疑ったほどであった。また、当時は丁度、今の天皇陛下と皇后陛下の御成婚して間もない頃でもあったせいか、日本国民が湧きに湧き上がった祝福と歓喜のさなかでもあった。明日に希望を託して、国民一人一人が復興に情熱を燃して勤勉に働いている姿を今もなお印象深く脳裏に残っている。私たちの年代で外国へ私費で留学する場合であっても国家の留学試験をパスしなければならないといったさまざまな厳しい制約の時代でもあった。また、国費留学は私の専攻しようとする土木の分野で日本にはなかった。戦前台湾大学におられた田中清先生が大阪大学におられることと父のアドバイスもあって、日本を留学先に選んだ。今、2人は共に亡き人になった。当時の阪大では、外国人留学生を受け入れる体制がほとんど整っていなかった。研究生を約半年して、同年の10月に日本人学生と同じ身分で大学院修士課程の入学試験を受け、幸いながら合格を得ることができた。翌年4月に院生となり、私の外国での本格的な留学生活が始まったのである。その時代は、今のように物資や食糧が豊富ではなかったし、留学生に提供する宿舎もなかった。大学の食堂ではきつねうどんとカレーライスがメインのメニューでもあった。ときには栄養の補給に奮張って分厚い衣の中につつまれた厚さ5ミリで5センチ四方面程度のクジラの肉片のビフかつ定食をとるのが、私にとっては何よりの御馳走でもあった。住宅難もあって、外国人留学生に提供する民間の寄宿舎は勿論のこと、今日のような立派な留学生寮や会館のたぐいのものは全くない。幸いにして、いまでも崩れ落ちそうな大阪大学キリスト教青年会の所属する磐上寮に入れてもらうことができ、十数人の日本人学生と共に2年間の共同生活を経験することができた。最後の1年間は寮長に推せられ、一階のホールにおいて皆さんと共に朝夕の礼拝をかかさず守り通したことがなよりの自慢である。寮には入浴の設備がなく、そのおかげで各地方から来られた学生と歩いて15分程のところにある銭湯で、それこそ裸と裸との付き合い、心と心との触れ合いができた。

修士課程を終えるころ、これから引き続いて博士課程に進学するかまたは、生活環境が保証されるアメリカへ行くかと迷っているところに、東京に留学しておる友人からロータリー米山記念奨学金制度があることを知り、当時中之島の新大阪ホテルにある国際ロータリー第365地区大阪ロータリークラブの事務所へ伺い、応募の機会が与えられ、これも

幸いにして1962.4～1965.3の3年間の米山フェローとなることができた。その時点では、今のように全国的な財団法人の組織ではなかったし、またカウンセラー制度もなかった。ただし、月一回の例会に出席する義務は今とは変わりはないが、私にとってはまず栄養の補給と忙しくしているロータリアンと席を共にできることがなによりも楽しみであった。また、当時の大阪大学総長、美智子妃殿下のおじであられました正田健次郎先生を例会の席上で紹介され、握手する機会を得、あの暖かいぬくもりは今も私の手のひらに残っている。私を世話してくれたのは当時関西汽船の会長をしておられた平井好一さんであった。何度か家に招かれ、親切にさせていただいた上に、所蔵の大阪湾の古地図を見せて貰いながら教授を賜った。それは、私の専攻である河海工学に大いに役立ったことはいうまでもない。また、大阪～別府航路での新造船「くれない丸」の往復切符をプレゼントしていただき、九大や長崎大に留学している友人を訪ねることができ、外国での楽しい一人旅の思い出を経験することもできた。当時大阪ロータリークラブの事務局におられた遠藤さんと熊谷さんは、私にとっても親切にしてくれた。例会の前後にはよく事務局を訪ね、色々と世間話をし、ロータリーについての事柄はむしろこのお二人から多くのことを教わった。遠藤さんは3年前まで、元気で一筋にクラブの奉仕に尽くされた。

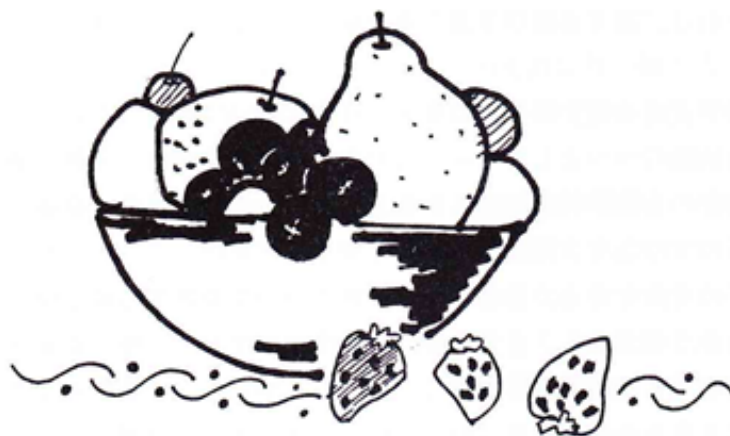
1965年3月、博士課程終了後アメリカのある大学より9月からのリサーチシップを獲得し、渡米する前に指導教授の紹介で暫く大阪にある建設コンサルタントに客をおいでいただいた。これが私の心に大きな隙間ができたのかがわかりませんが、今の女房と一緒にになり、そのまま大阪に居座り、今日に至ってしまった理由の一つでもある。1980年4月から大学に奉職する機会が与えられ、その間、地区米山奨学生終了者の歡送会やローターアクト年次大会などを参加しているうちに、当時の世戸バスターガバナー、武尾現直前バスターガバナー、学園理事長大西先生ら皆様方のご推薦により、1984年10月にロータリアン、また1986年5月の米山学友会（関西）創立総会にて初代会長にお推せられ、これもロータリーと切りに切れない宿命があったに違いない。当時、学友会の創設に当っては、魏栢良現会長、文燕友現幹事長、林錫璋元副会長皆様方の「滅私奉公」といった絶大なるご奉仕とご協力があったことをここに付け加えたい。

私のカウンセラー歴は浅く、ただ今、二人目を経験中である。最初の方は関西大学経済学専攻博士課程の学生さんで、昨年の4月、母国の経済研究所に就職する機会を得、奨学金の受給期間をあと1年残して帰国されました。帰国後、現地のロータリークラブの卓話に招かれたことや研究活動の近況など心のこもった多くの手紙をいただき、また、去る3月20日にははるばる台湾から可愛い新婦を連れて、クラブの例会に結婚の報告に来られた。私どもカウンセラーにとっては何事にも優る喜びである。現在の方は、神戸大学文化研究科博士課程2年の学生さんで、私の専攻と全く異なる分野ではあるが、それも色々研究の状況を訪ねるうちに、相手から学び、教えられることが大いにあることに驚かされる。例え、月1回例会の極く僅かな時間であっても、奨学生は多くのロータリアンが、親身になって話しかけてくれることを期待しているに違いない。クラブでお世話する以上、カウンセラーだけにお任せするのではなく、余裕ある方は遠慮なく積極的に話しかけていくようにすれば、奨学生はどんなに喜ぶであろう。今は、ただ物を薦め、金銭を出せばいいというご時世ではないように思う。物心両面よりの援助を唱えながら、心あって力不足ではまだ弁解の余地はあるが、その逆は考えもの。勿論、奨学生側からも同じことがいえる。

互いに文化、風俗習慣を異にするもの者が接するのであるから、その接するタイミング

も大事であろう。禅に、「啐啄同時」という言葉がある。卵がふ化するとき、雛鳥が内側から殻をコツコツとつつくことを「啐」、親鳥がそれに答えて、外から卵をつつくことを「啄」という。相互のタイミングが少しでもずれると、雛鳥が死んでしまう。これは、禅の修行において、師と弟子との呼吸がぴったり合っていることの大事さを言っている。人と人との出会いにおいても、「啐啄同時」が大事であり、理想でもある。しかし、大勢の人と出会わなければならない日常の生活では不同時になることが多い。こちらが一生懸命に相手のことを考え、相手のためにしてあげているのに、その善意が通じず、かえって誤解を招く。この場合には引き下がるタイミングも必要であるが、とはいつて引き下がればなしでも困る。この世の一切は変化するものであると仏教はそう教える。だから自他とも良くなったり、悪くなったりするように変化する。このような変化の状態の中で二人が合うのだから、ベストの同時はめったにない。そうであれば、互いに気が楽になり、何時しか心と心の触れ合いができ、理解も深まる。

30数年前とは違って、今日のようにすばらしい環境や交流の場が与えられているのだから、我々自から積極的に求めていき、融合していくような努力が何よりも大切な事ではないでしょうか。それにもまして、我々は皆共に地球社会の構成員であるのだから、今なにをなすべきかを、共に考え、共に実践し、共に歩み続けて行けない筈はないものと確信する。





「学友会創立5年目を迎えて」

米山奨学生学友会（関西）

幹事長 文 燕 友

1986年5月に「関西学友会」が創立されて以来、早くも満4年の歳月が過ぎた。当時には、わずかなメンバーで細々と活動を始めたのであるが、以後徐々に関西学友会の知名度も高まり、会員の積極的な参加を得て、今では250人を越す大家族にまでなった。創立メンバーの一人として、ほっとすると同時に会員の皆さんにこの紙面を借りて感謝を述べたいと思う。

去る5月の総会では2度目の役員改正があり、私は今期（1990.5-1992.4）の幹事長をつとめることになったので、次の二つの点について会員のみなさんにお話したい。

一つ、「学友会の性格づくり、および望ましい有り方」について

創立以来、学友会はその進むべき道を模索しながら回を重ねてきた。が、今までのように一部の人の考えだけでなく、今後は、会員のみんなの意志をできるだけ反映した会の運営が望ましいと思う。みんなで学友会の活動に参加し、性格づくりをも含めその進むべき道を考えていく時点にきていると思われる。そのためには、会員のより積極的な参加、発言、提案などが期待される。それをできるだけ今後の学友会の運営に反映して行きたいと思う。

二つ、「会報」について

みなさんも周知のとおり、日本には「関西学友会」以外にも、各地方にいくつかの学友会が組織されている。が、我々が発行しているような「会報」を出しているところはどこにもない。それは、我々と他の学友会が目指しているところの違いでもあると理解している。

改めて「関西学友会会報」の発行の意味、目標について喚起したい。

我々が学友会活動の一つとしてもっとも力を入れてきたのは「会報」発行の仕事である。学友会の大部分の会員が将来研究者を志している点を踏まえ、会報を単なる感想文の寄せ集めにするのではなく、将来は研究論文集として発行していくつもりである。つまり、会報を通じての交流を考え、各自の研究分野について発表する場を提供しようとするところに目標をおいたのである。自分の専門領域内だけでなく、他の領域間における情報交換に会報を利用してもらいたいと願っている。したがって、会員のみなさんには、もっと積極的に自分の文章を会報に載せ、お互いに役に立つよう、利用することをお勧めしたいのである。現時点では、目標としているところにほど遠い感はあるが、みなさんの協力で有効な会報づくりをして行きたいと思う。



少しずつ成熟していく 米山奨学生学友会(関西)への期待

米山奨学生学友会(関西)

第264地区担当副会長 黄 承 國

大阪府立大学工学研究科博士課程

日本に留学してもう5年目に入ってます。はじめての外国での住しきもそろそろ後にしてもよい時期になりました。私にとって日本も外国であることは確かですが、私の国と日本での生活はすでに私の活動の領域に入っていますのであまり区別しなくなっていることを意味します。このように、自分の人生の活動の領域が少しずつ広がっていくことにより、いままで知らなかった面と接することができ、自分の考えなどの変化を持て来ます。私はこのようなことを自分も知らないうちに楽しんでいることに気づきました。最近私といろいろな話を交わしているある女性の話によると、“われわれ留学生が自分以外の国で勉強することはただ勉強することではなくその勉強以外の勉強、すなわちその国の人々との付き合いによりその国の国民性、文化などを学ぶことによって自分の考えの範囲が広くなり、より発展的になると自分はそう考えている。”ということでした。私も彼女の意見に賛成しているが、それを実践する方法については人それぞれの状況が違うので、その方法はこれだという一言では言えないと思います。私は人間一人一人が持っている個性を大事に考えておきたいからです。

私において、自分の勉強以外に日本留学の主な実としてはいろいろな職を持っている人々の集まりであるロータリーアンとの出会いであります。その集合のなかには様々な人間の実物がありますので、自分自身が今まで経験してないことを間接的に経験することができ、自分の人生の領域をより幅広くすることができました。なお、自分の人生と自分が生きているこの社会でなにをやっていくべきかを明確に教えてくれました。

いまからは自分の国と日本を自分の生活圏におきながらそれ以外の国と人々に対しても目を向けていきたいです。それでこの地球村に少しでも役に立つことをして自分の与えられた人生の役目を終わりたいのです。

さて、未熟な私が今年から2年間の任期の米山奨学生学友会(関西)の第264地区担当の副会長になりまして、いまその挨拶を皆様にするわけであります。いまからわれわれという気持ちを持って、お互いに真の交流が行えるように自分がなにをすべきかについて皆様一緒に考えてみましょう。まず自分と仲がよくない人に対してこの紙面を通じて私のほうから先にあやまることを考えます。できるだけ自分に対する敵がないように、また作らないようにすべての考えと行動とが行えるように努力いたします。

皆様、自分の意志で自分の時間を投資し、素晴らしい集まりであるロータリーの中に入ってそれを楽しんで見ませんか。その楽しみというのは、自分が米山奨学生学友会の活動に参加することによって米山奨学生学友会が少しずつ成熟していくことを感じることで。ここで、米山奨学生学友会が少しずつ成熟していくことを意味している今回の会報の表紙をその目的にぴったりあわせて作ってくれました親睦幹事の金美貞氏に感謝の意を表します。

最後に、われわれ米山奨学生学友会（関西）が力を入れている会報について、よりよい内容でわれわれの紙面としての真の交流の場になるように会員全員の御協力を期待しますので、宜しくお願い致します。なお、米山記念奨学会ならびに奨学生の世話を頂いている各ロータリークラブの皆様に対し心より深くお礼申し上げますとともに今後とも学友会へのご支援を宜しくお願い申し上げます。





日本の留学生政策の問題

第266地区担当副会長 ディリープ チャンドララル
DILEEP CHANDRALAL

神戸大学文化科学研究科博士課程

平成2年2月1日に神戸大学国際交流センター主催で広島大学大学教育研究センターの江淵一公教授を講師として迎えて、『留学生増加のインパクト—21世紀留学生10万人計画の対応—』の演題で講演会が開催されました。

1988年広島で行われた『留学生問題をどう扱うか』の国際シンポジウムに参加した江淵教授がその会議で議論されたことを中心に留学生問題について、さまざまな受入れの傾向や問題点を詳しく述べました。留学生受入れについての観察として大変鋭くて、意味深い講演でした。

以下、この講演会で述べられたいくつかの問題点が留学生実際経験を交えて、具体化されます。

まず、行政機関レベルでの問題の一つです。最近、日本では外国人留学生が急激に増えてきました。経済大国の日本と発展途上国型のアジアというかわりによって留学生資格を利用して在留資格を求める人も増えてきました。そこで資格審査が厳しくなりました。というよりも行政側からゆがんだ見方が出てきました。希望者が自国で学校を卒業してから五年間以内日本留学に申請しなければならない。あるいは、なぜ日本語を習う必要があるかを将来採用されるビジネス機関を通して証明しなければならない。これが、私費留学希望者が日本で入学・入国手続をするとき、関係の機関から彼らに要求される一つの暗黙の基準になっているようです。そこでは、留学目的として文化的理由がほとんどきかないみたい。日本への興味や日本との文化交流への希望などがとても理由にならないことが残念です。留学生と不法労働者を別々なアプローチで取り扱うべきではないでしょうか。

次に、大学レベルでの受入れ問題を考えてみます。特に、大学院レベルにいくと、国費留学生しか受入れない国立大学が日本にあります。また、日本語の読み書きや聴く能力が充分あっても、希望する大学の研究生として一年間過ごさないかぎり、その大学に入れないという条件を付ける国立大学もあります。日本の大学が私費留学生に対してこのような差別を付けながら閉鎖性を続けるなら、日本の国際教育の基盤全体が問われるに違いありません。

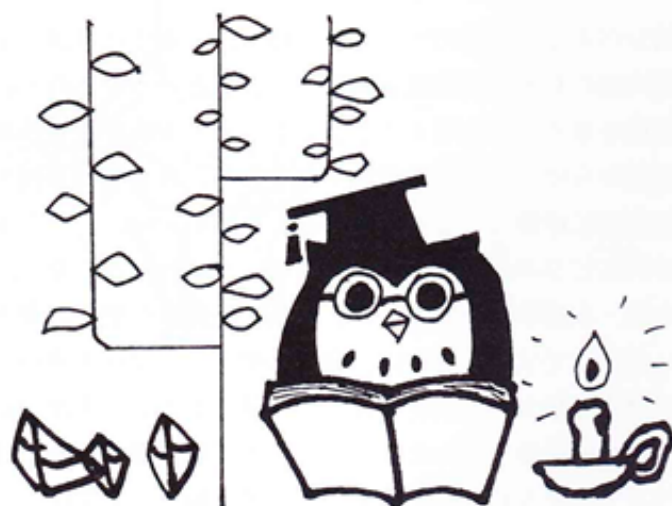
第三に、日本の大学の留学生の受入れにおいて、一方的受入れ傾向が圧倒的に強いというところに問題点を感じます。日本の大学にとって、留学生はいつまでも教育の対象だけです。研究パートナーとして受け入れることはありません。日本の先生方は「教育してやりましょう」という気持が強いようです。もちろん、私達は教育してもらうために日本に来ました。しかし、研究生活の成長につれて、留学生も日本の大学教育になにか与えるものを持つようになります。アメリカでは留学生のその力が認められています。博士課程の留学生が一般の学部生を指導することがあります。

日本の大学にはこのような受入れ制度がありません。日本の縦社会の中にこのようなことが制度的に無理でしょうか。私の知っている限り、神戸大学の文化科学研究科の言語学研

研究室においては、日本人や留学生に関係なく、大学院生によるteaching assistant制度を非公式に設けています。それはまた留学生が帰国して、大学などで教壇に立つとき、大変役に立ちます。

日本人の留学生受入れは、最近急速に拡大していますが、他の先進国と比較するとまだ十分とはいえないことも事実です。なかでも、全体の約80%を占める私費留学生に対する施策は不十分です。経済的援助施設と共に大学などにおける受入れや教育指導体制の充実も望むところでございます。

資料：神戸大学国際交流センターニュース 1990年4月第49号





台湾における外資系広告会社の 進出と文化摩擦」

第268地区担当副会長 大塚賢龍

甲子園大学経営情報学科

最近の五年間、台湾の広告業界は過去半世紀で総てを覆すような変化の渦の中にあった。我々報告を研究する者から見れば、1985年に台湾市場が外資系広告会社に門戸を開放し、100%外資の現地法人の設立も許可するという政府の政策転向は、大変化の端緒を開くものであった。続いて1987年に40年間も続いた戒厳令の解除、さらに同年に過去の一党独裁から複数政党設立の容認、また1988年1月には新聞の新規発行と紙面枚数制限の禁令が解かれ、少し遅れて証券会社も自由化された。これらの変化は、台湾の政治、経済、社会、文化の各方面に影響を及ぼし、連鎖的に大変化を引き起こした。時代の流れに感じ易い広告業は、この激動の時代に急成長を持たらした。

この小論は、急成長を成し遂げてきた台湾の広告業が外資系広告会社の進出による文化摩擦について示そうとするものである。

1. 広告費の伸び

1985年から1989年までの5年間に、台湾の総広告費は、当初の5億1千3百万米ドルから、去年の18億3千万米ドルに大幅に伸びた。年平均成長率は38%に上り、この5年間の量的拡大は実に3.58倍に達した。この期間に台湾の貨幣—台湾元は1米ドル40元から、1米ドル26元まで、いわゆる「元高」になったことを併せて考察すると、台湾通貨での表示にすれば、年平均成長率は24%で、5年間で2.35倍まで拡大されたと見るのが妥当であろう。

この間において台湾の広告費はGNPに対して0.7%から1.22%迄になり、漸く日本のレベルに追い付こうとし、また一人当たりの広告費は91.18米ドルで1989年の広告費は韓国に比べて少し低く、世界ランキングでは15番目に位置している現状である。

2. 外資系広告会社の進出

台湾広告業界の30年間の歴史の中で、日本の電通は一貫として大きな役割を果たしてきた。電通は常に指導的な立場に立っており、現地の広告会社数社と業務提携や技術提携を行ってきたが、政府当局の一業1社の制約もあって、ついに資本提携するまでには至らなかった。

それが1985年外資系広告会社への門戸開放により形勢が一変された。台湾のトップ10の広告会社の中の6つはすでに外資系の手に落ちている。今や、世界のトップ20の多国籍広告会社が台湾に進出するようになった。欧米系の進出は特に早く、OGILVY & MATHER, McCANN-ERICKSONを初めとして、GREY, BOZELL, LEO BURNETT, BBDO, HDM, BALL PARTNERSHIP, LINNTAS, FCB, WALTER THOMPSON, DDB NEEDHAM等が何れも資本提携によるジョイントベンチャーを作ったり、100%子会社の現地法人を作ったりしている。日本の広告会社は少々出遅れていたが、現在すでに第一企画、東急エージェンシー、博報堂、旭通信社、大広等が進出し、ほとんど50%以上の株式を占めたジョイントベンチャーを作っている。

欧米系の広告会社は、各々広告主である巨大な多国籍企業の先兵として進出しているので、広告主の膨大な広告予算のお陰で、短期間の中に総広告量が、広告代理店の上位に躍り出てきた。日系広告会社では、直接投資は第一企画が先端を切り、今では現地広告会社と合資の形で50%のシェアを持った「太一広告」を作った。続いて東急エージェンシーが東方広告と50%対50%で「東急東方」を、博報堂が60%を持って現地の本田山陽グループと「博陽」を、旭通信社が中国信託系と、やはり50%対50%で「聯旭」を、また大広が40%、GREY社40%、現地20%の中日米三ヵ国ハイブリットの広告会社が誕生した。

3. 外資系広告会社との文化摩擦

台湾は50才以上の日本語を解する経営者が徐々に第一線から退いて行く。40才以下の準トップや、ミドル管理層は十年以上にわたる英語教育とさらに米国留学でマスター以上の学位を修得して帰国した者が新エリート層を形成し、欧米系外資とその経営方式が受容され易い風土を作ってきた。台湾の人は、一般的に個人主義者が多く、独立して一旗上げたいという願望が多く、自己実現欲が強いように思われる。しかし、欧米人と比べて、給与や昇進の機会について満足している限り、会社への忠誠や集団意識が遥かに強いと云える。

外資系広告会社の進出にせよ、その他企業の進出にせよ、要は人間関係の問題になるが、私は自分の経験を通じて、いわゆるカルチャーギャップは、異国の間に存在するだけでなく、世代間にも存在するものであるので、進出する側が気配りをして現地の文化、歴史、経済などの事情をよく理解し、現地に融合する覚悟で望めば、決して克服できないものではないと思う。そして、歴史的または、現実的な諸要因からも、台湾は、日本の良きパートナーとして足り得るものと自負している。—以上—





旅 情

米山奨学生学友会

幹事(学術) 千 文 奉

大阪府立大学 経済学研究科博士課程

さる7月10日から7月13日まで四日間行われた国際学会に参加した。場所は北九州の産業医科大学で大阪からはかなり遠いところである。新幹線で新大阪から小倉迄約3時間、小倉駅から折尾駅まで30分で大学までは約4時間もかかる。そこでは韓国からこられた先生方にも会えて意義の大きい学会であった。学会が終わり私はせっかく来たのだから先生方々と一緒に旅行に出かけることにした。九州の方は初めてだったのでもっとも南の方へ行きたかった。はじめに着いたところは福岡市の西戸崎という小さい駅だったが、その駅から5分位歩いたら海の中道海浜公園があった(写真1)。公園は本当にきれいだったが、



一つユニークなものが目に留まった。写真でもわかるように二つの自転車専用道路がある。そこでは自転車を借りて乗り回るシステムとなっていたが、その自転車と言うものがなんとこれである。(写真2)はじめてみた私としては乗ってみたい気持ちでいっぱいであった。子供みたいに楽しくすごく面白かった。しかし二人の足のタイミングがうまくかみ合っていないと危ないことがわかった。二人が協力し合えば疲れずによく走る。呼吸が合わなければうまく進まずに疲れやすい。労使関係のことを研究している私にとっては貴重な教訓であった。TWO HANDLE原理(?)と言っていいかも。きっと仲良しの夫婦は仲の悪い夫婦よりよく走られると確信する。みなさん、愛情テストにはいかがでしょうか。



つぎの日にはもっと南のほうである長崎オランダ村 (HOLLAND VILLAGE) にたどり着いた。これは (写真3) 一部の光景である。入場する際にオランダ村の外務大臣が発行するパスポートがないと入村できないのが面白い。見所はたくさんあったが私は展示されていた船に興味を引かれてカメラに入れてきた。興味のお持ちの方はどうぞ。



遠い旅に疲れたけれども旅行って本当にいいものだね。入場料が少し安かったらと気がするものの、もう一度行きたい。みなさんにもぜひ行っていただきたい。自信を持ってお勧め致します。来年は北の方に挑戦しよう。



池田のおばさんのこと

許 紫 芬

甲子園大学経営情報学科

米山奨学生としてお世話になりまして、もう七年間立ちました。その間に大阪東ロータリークラブの皆様から沢山のご指導とご援助を頂きました。謹んでお礼を申し上げます。

特に申し上げたいことは、牧野耕二・前会長から『宮本又次著作集』10冊をプレゼントしていただきました。私の専門分野—経済史の大著ですので、私へのご期待の深さも感じております。その著作を読むたびに感動し、また勉学と研究の意欲がそのたびに燃えてきます。

私のカウンセラー稲本晃先生は、いつもお手紙でご指導をいただくのですが、私が困っていることを事前に察して、手紙を書いてくださいます。そのたびに、涙がこぼれる程うれしく、ありがたい気持で一杯になります。

またロータリアンの皆様と接する機会を与えられました。皆様と話しているうちに、日本への理解を深め、皆様の仕事に対する行き届いた計画、人間と接する態度、お話し言葉がすべて私の勉強になります。

このように私にとって日本での生活の恩人は沢山いらっしゃいますが、ここは名もない1人のおばさんについてお話してみたいと思います。

私の心の中でいつも「池田のおばさま」と呼んでいるお年寄りのことです。このお年寄り、ご本人は「おばさん」ではなく、「おばさま」と呼ばないとたいへんご機嫌が悪いのです。ですからここでも「おばさま」と言わせていただきます。

私は大阪大学修士課程に入学したころ、大学の留学生相談室の紹介で、下宿するようになりました。その下宿でいろいろのことを教えてくれたのが、この池田のおばさまです。大阪・池田のおばさま宅で暮らした約十年間に、私の人生は天変地異的な影響を受けたと思います。

大阪大学の女子学生ばかりを預かって面倒をみるおばさまは、自分の下宿に「ハウス・ハッピー」と名づけられました。ここで暮らしている間に、楽しい日々を送ることができるようにとの念願でした。

私達はほとんど毎日、おばさまのお茶の間でお茶会に招かれました。お煎茶からおうすまで、ときには紅茶・コーヒが用意されており、お菓子を頂きながら、一日の出来事を話し合います。お菓子を大皿に乗せて、順番にまわすとき、「お先に」と言って、次の人におじぎして、まわすのですよと、おばさまに教えられました。当時、台湾からの留学生、私をふくめて三人と日本人の女子学生2人、5人がお世話になっておりました。毎日、夕食を済ませて暫くした後のお茶会では、私達の交流の場所になります。

おばさまは、年中行事（例えば、お正月・桃の節句・端午の節句・中秋の名月・など）の雰囲気が好きで、毎年行ないます。その時、お料理も用意して、私達を呼んで一緒にエンジョイします。

おばさまはよく「六人の共同生活は、ひとつの小さい社会です。ここでお互いに学びあ

いましょう」とおっしゃいました。色んな場面に出会うたびに、私は日本の礼儀作用を学んできました。また言葉遣いも、私がおばさまにたずねるたびに、おばさまがきちんと教えてくださいました。

おばさまが最も大事にしたのは、生活のルールを厳しく守ることでした。

例えば、掃除当番。当時、私を含む五人の女子大生が、毎日交替で共有スペース（台所・ローカ・トイレなど）を掃除することが義務づけられていました。掃除当番表を作って、ローカに貼っております。

掃除をきちんと済ませると、おばさまは必ず“綺麗になりましたね”“お掃除ありがとうございました。”と褒めてくれるのですが、忘れてたり、いい加減にすると“お掃除は済みましたか”とこちらが震えあがるような顔で睨みます。

はじめて、おばさまの下宿へ行ったとき、トイレがとても綺麗で、ぴかぴか光るぐらいなので、びっくりしました。住んでいるうちに、洗剤の使い方、ふきんの洗い方、雑巾の管理など、必要な知識を一通り教えられて、きちんと掃除当番をしないと喜んで貰えない。そのお陰で、今でも掃除することが習慣になって、お掃除の楽しさが分かってきました。私は今、誰にも負けない程、上手で自慢できます。

また門限厳守、外泊届けなども徹底していました。

私達には、門限がありました。夏には夜の10時、冬には夜の9時でした。門限になるとおばさまは、門を二重かぎで締め、お休みの用意をします。帰れないとき、前もって門限前に電話して、

“今晚、遅くなります。×時×分頃つきますので、門をよろしく願います。”と事前をお願いして、報告します。そうでないとおばさまにご迷惑をかけてしまうからです。

私は必死に門限を守り、万一遅れる場合は、必ず電話連絡したものです。イライラしながら電話を探すのに走りまわったこともありました。私は今でも大学のコンパなどの二次会は無意識にお断りすることにしていますが、それは、大分、あの頃の門限厳守の習慣が生きているからでしょう。

お風呂のことですが、私達がその日、お風呂を頂きたいとき、自分の札をおばさまが作った「札がけ」にかけます。そして、当日、おばさまがお風呂を沸かしてくれます。湧きましたら、おばさまが一番の方に声をかけます。

“許さん、お風呂をどうぞ。”そして、一番の方（許）が二番の方（沢）へ、“沢さん、お風呂をお先に。”

またお風呂が済ましたら、お風呂場のまわりを綺麗にして、お湯のかけんも適当にしてから、つぎの方へ声をかけます。

“沢さん、お風呂をどうぞ。”

二番の方は、声をかけられると、用意したものを持って、おばさまの所へご挨拶にいきま

す。

“おばさま、お風呂を頂きます。”

済ましたら、

“おばさま、お風呂をありがとうございました。”と挨拶するように、おばさまに教えられました。

このように言葉使いからお風呂を頂くルールまで、すべてきちんとされておりました。

各自の部屋には電話を置かない方針で、外からの電話はすべておばさまが受けとってか

ら本人へとりつぎます。なぜかときいたら、私達は学生ですから、電話がない方が勉強の邪魔にならないのです。と説明してくれました。おばさまが私達の電話当番をしてくれま
すので、外泊の場合は、事前に外泊届を出さなければならない。外泊先・電話・用件・帰
る日時などを書いて、出かける前に、おばさまに渡します。

“留守中、色々よろしくお願いします。”と挨拶してから出かけます。このように共
同生活のルールをおばさまに教えられました。

“共同生活のルールが守れないなら、ルールのない自由な所を探してあげるから、そこ
へ行きなさい。”

おばさまに言われて、追いだされた女の子もいました。

現在の日本の社会、あるいは家庭生活からみると、池田のおばさまの厳しさには馴染み
にくいものがあるかも知れません。しかし、それまで社会生活のルールと言うものに、ほ
とんど無頓着だった私にとっては、この厳格さに対応して十年間、ごく自然にチャレンジ
することができたのは、本当に幸運だったと、今でもしみじみ思っています。

期限ぎりぎり、博士号を取得できたのも、六年間というルールにごく自然に対応した
結果だと思うのですが、これはまさに、この池田のおばさまのルール主義のたまものと言
うしかありません。

この池田のおばさまも、もう七十歳を越えています。今でも、あの厳しさを守りなが
ら、九十六歳のお母さんのお世話をし、ますますお元気なようです。

“おばさま、ありがとう、どうぞ、お大事に”

私はいつも、心の中で祈っております。

付記：この原稿は10月11日：大阪東ロータリークラブで「米山月間にちなんで」での卓話
の内容です。





日韓祝日の比較

米山奨学生学友会（関西）

大阪市立大学代表 褒 貞 烈

大阪市立大学文学研究科博士課程
(1990年現在)

	韓 国	日 本
1月	1日 新正	1日 元日 15日 成人の日
2月	旧暦の正月（民俗の日）	11日 建国記念の日
3月	1日 三一節	21日 春分の日
4月	5日 植木日	29日 みどりの日
5月	5日 子供の日 4月8日（旧暦）釈迦誕辰日	3日 憲法記念日 4日 国民の休日 5日 子供の日
6月	6日 顯忠日	
7月	17日 制憲節	
8月	15日 光復節	
9月	8月15日（旧暦）秋夕	15日 敬老の日 23日 秋分の日
10月	1日 国軍の日 3日 開天節 9日 ハングルの日	10日 体育の日
11月		3日 文化の日 23日 勤労感謝の日
12月	25日 クリスマス	23日 天皇誕生日

※11月12日 即位の礼

私は昭和62年から64年3月まで米山奨学生として大阪鶴見ロータリークラブのお世話になった。深くお礼を申し上げる。そしてこの文章は、当時卓話で話したものである。

最近、日本と韓半島をめぐる外交関係の進歩にうれしく思い、日本の役割に期待をしている。もはや両国は互いを知るという段階を越え、互いの立場を理解し、どんな苦境をものりこえて友交関係の持続を保つべきだろう。そのような主題にそって、今日（1990）の

韓国の祝日を紹介したい。

左の表を一通り見ると同じ祝日がある。例えば、元日、建国記念日（開天節）、みどりの日（植木日）、憲法記念日（制憲節）、子供の日等がある。日韓両国とも同じ行事が行われていると思う。なるべく日本と異なった面を紹介したい。今も韓国では旧暦が多く使われている事に気づくだろう。特に韓国人は誕生日や法事などは、必ず旧暦を使い、人の年もかぞえ年を使う。根強く伝統を守っていることがうかがわれる。

その次に3.1節と光復節がある。この二つは日本との関係で生まれたものである。3.1節とは日帝時代に独立運動が起った日でありその発生地には独立記念館を作り、見学者があとをたえない。光復節とは日本の終戦日にあたる日である。日韓の近代における歴史のむずかしさでもある。韓国とは多くの過去の歴史が解決できたような気もするが、これからは北朝鮮との関係がのこっていると思う。うまく解決できることをのぞむ。このような祝日により韓国における近代歴史の教育という面がうかがわれる。

釈迦誕生日とクリスマスのような宗教的な祝日もある。国民の1/3ずつが両宗教に属しているそうである。韓国のどこにも大きな教会が目立つようになり、人々の価値観も伝統的な方から変化しつつあることもわかる。

その次に顯忠日がある。これは朝鮮動乱やベトナム戦争の時の死亡者達の慰霊の日である。近代における韓半島の混沌の歴史がうかがわれる。そして国軍の日があり、国の国防力を自慢している理由も理解できそうである。（国軍の日が祝日であるのは今年で最後である）

最後に制憲節（憲法記念日）についてふれたい。韓国は憲法が制定され数回にわたる改定が行われて来た。それに比べ日本は憲法の解釈をめくり議論がたえない。もう一つ日本は国名を日本と定めてから今まで日本である。それに比べ韓国はいろんな国名を持っている。この点に日韓の一番大きな違いがあると私は思う。





日本社会の特殊性 —中国社会と比較して—

米山奨学生学友会（関西）

幹事（会計）林 珠 雪

神戸大学文化科学研究科 博士二年

中国、インド、エジプトとも長い歴史と優れた母体文化を持っていた文明古国であります。近代になるといずれも衰弱の運命を逃れることができなかつた。それは、歴史の変遷における興、盛、衰、亡の常理の結果であります。その原因を考える場合、いずれの国も自国の文化が重荷となっていたことを指摘したいと思つます。

中国において、漢武帝の頃より、二千年の間にわたつて、儒教は「正統思想」として中華文化を支配していました。歴史過程に応じて、その包容性を十分発揮し、民族の融合だけでなく、仏教思想もその文化体系の中に吸収し、中国化していました。仏教の場合は例外であります。中華文化はいつも文化輸出の地位を占めていました。そのため、中国はその長期的発展過程において、容易に自国の文化的優越感を養い、他文化の優越性をあまり認めず、自己中心の自慢状況に陥っていました。

このような意識は、一種の文化的重荷とも言えると思つますが、これは非常に長い期間にわたつて培われてきましたから、なかなか捨てられず、そのため西洋文化を取り入れた近代化も遅れてしまいました。故に、明治維新前の日本と当時の中国は国際状況の中で、同じように列強諸国に圧迫されましたが、日本はこの状態の中から脱出して、近代化に成功したのに対して、中国は「自強運動」もおこしましたが、結局失敗に帰して、列強の侵略対象となりました。

一、文化の柔軟性—伝統と現実の不可思議の結合

日本は外来文化を吸収する時、常に実用性を考慮して吸収し、さらにそれを自国の伝統的構造と妥協融合させていました。過去中国文化の輸入はそうであり、近代の西洋文化の吸収においても同様でありました。

儒教の家族主義は中国において、「孝」がその中心思想であります。そこでは政治的「忠」との連続性は持っていなかつた。中国も君主専制の伝統を持っていましたが、日本と同じような「万世一系」の天皇制ではなく、それぞれの王朝によって、君主の宗家も違つています。また、漢民族は中華民族の中心地位を占めていましたが、歴史の過程に応じて、「五族融合」の状態もあり、国家が多くの習俗、民族文化を含んで成立していました。そのような多様性のために、国家を一つの家としてとらえることがおこりにくかつた。そこで君主に対しての「忠」を「孝」と転じにくいのであります。しかし、日本においての儒教の吸収は幕藩の封建体制維新のために、「忠」が中核思想となってきました。さらに、近代国家の中央集権の要求の中で、「尊王攘夷」論は「尊王倒幕」と転じて、「忠」の対象は「族父立憲体系」の大宗家—天皇となってきました。また、国民的自主性を喚起し、国際情勢にも適応するために、西洋の社会進化論と有機体論を取り入れました。天皇制イデオロギーの中にある家族主義とこれらの思想は矛盾するものだった。しかし、矛盾性を持っている思想を「天皇制」という伝統的基礎の上に、癒着させていくことは日本思想の柔軟性の象徴であります。

二、「家」と「共同体」の忠誠心と団結精神

このような柔軟性は戦後の日本の経済の面においてもみられます。終戦後日本は飛躍的な経済発展を遂げました。その成功の原因は、単純に論ずることができないが、その基本的な原因はやはりその伝統構造と現代経営精神の不可思議な結合であります。

「年功序列制」、「終身雇用制」、等の制度及び職員の家族に対する厚生福利制度によって、社会も縦の従属の関係で、一種の親方子方的擬制的家族関係となりました。職員は家族に対する愛情及び実際的な利害関係のゆえに、会社に「忠誠心」を持っています。このような関係は戦後の経済発展という新しい課題と天皇制的家族国家観との結合と考えられます。これも日本の文化の柔軟性を象徴するものであります。

これに対して中国では、伝統と現代経営精神との結合は、非常に弱い。両者は結合よりむしろ現代経営精神を取り入れるとしたら、伝統構造はある程度壊されなくてはならないというような関係にあります。日本に比べて、中国の柔軟性が弱いのはこのような点にも現われています。

また、中国は日本に比べて共同体構造が弱いので、団結精神や共同体への「忠誠心」は殆ど現われません。そのために、中国は日本の経営制度を取り入れたとしても、忠誠心を喚起しにくいのであります。その原因は、中国における伝統的な社会構造と意識の違いに求めなければなりません。

そして、日本における縦の連続を強くさせるための共同体構造も一つの重点であります。

三、封建時代の世襲的身分制に恵まれた「本分観念」の発達であります。

徳川幕府の封建時代において、「士、農、工、商」の階級世襲とこの「家」と「共同体」との結合は、整然とした社会秩序を形づくっていました。そして、共同体の固い連続と組織の中で、人民は往々として自分の本分を守るしかなく、出世というのは本分の仕事に励むしかありません。

この「本分観念」は、現在でも見られます。例えば：「終身雇用」の制度、茶道、華道の家元とその継承制及び長子は自分の家業を継承する責任を背負うという観念等その一例であります。また、いろいろな職場でも本分観念はまだ残されています。

ところで、中国の場合においては、中華民国樹立以前の中国社会の構造をみれば、その基礎にあるのは家族であり、その上に政府があり、政府の最高主権者は皇帝であります。そして、社会の中で支配の地位にあるのは各地の官吏と士人です。また、科挙制度によって、どんな身分の人でも、官吏の身分に昇進し、富貴となります。人民の出世の道は「科挙」であり、「権位本位」がその中心観念でありました。

日本と中国は基本的にはともに「士、農、工、商」の階層性が見られますが、封建的世襲は両国の間に、大きな差異を示しました。

「本分観念」の現実目標は身分によって、決められた仕事を通じての出世であり、「権位本位観念」の目標をその身分に関わらず、官吏になることでもあります。そして、近代社会を建設する場合には、前者は後者より現実の実用性を重視するので、成功する可能性も高く持っています。

後者はそれまで持っている特権や地位を維持しようとする傾向が強いために、近代的な要素を付け入れにくい。そのために近代社会の建設の速度が遅くなる可能性をより多く持っていると思います。

以上簡単に思想、社会の面での柔軟性と本分観念の点から中国と日本を比較してみました。主として近代化という視点から両国の差異を見てきましたが、知識はまた浅薄ですから、論点の不十分な所はたくさん存していると思います。一応感想文のようなものとして、皆様と意見を交わしたいと思います。





ニューヨークで出会った 若者達の夢

米山奨学生学友会（関西）

幹事（親睦）金 美 貞

京都市立芸術大学美術研究科修士課程

今年の夏ニューヨークに行った時、偶然に“Worlddream”という存在を知ることができた。“Worlddream”とは、国際化時代の韓国人の若者達の夢を育てていく集まりである。

ニューヨーク市内から車で1時間半位走ったところにLONG ISLAND大学のSOUTHAMPTON CAMPUSがある。私は、そこで毎日撮影していた。そこは、非常に空気もきれいし、景色もいいところであった。そのまわりは全部海である。このようなところで“Worlddream”の集まりがあったわけである。すなわち、夏休みを利用して世界の22ヶ国とアメリカの25州から韓国人の学生500名が集まったわけである。私の目には、ただ一つの国の学生達の集まりではなく、国際人の集まりに見えるほど、みんなが自由にのびのびと友情を深めていく姿であった。“Worlddream”の代表会長である趙根用君から、“われわれは世界を学ぶこと、すなわち各国に住んでいる学生達が集まっていろいろな情報や経験および知識などを学ぶとともに友情を深めていくことが“Worlddream”の目的だ”と聞いた。その話を聞いたとき、私自身のことを考えてみた。いま日本で留学している私は、いつも自分自身の専攻の勉強のための時間との戦いであったような感じがした。もちろん、日本に留学して自分の専攻の勉強は大切なことであるが、自分の専攻以外の分野においてもなにを学ぶべきかと考えてみるべきだと思った。これが本当の留学の意味であることを考えさせていただいたわけである。

毎日の時間の中で、私達留学生は心の国際人になることを心がける必要があると思う。たまには奈良に行って自然を見ることも、その中でほんの少しだけでも日本の一部分を見ることが出来るかも知れません。そのようなささやかなことが私達留学生に必要なかも知れません。



四年目の日本留学にて

米山奨学生学友会（関西）

大阪大学代表 李 幸 禧

大阪大学文学研究科博士課程

留学生はどのように日本社会に適応してきたかについて、ある日本語教育者はそのプロセスを五つのパターンに分けて次のように述べた。

1. 入国期 日本へ入国したばかりの時期で、留学生は日本に対して期待と不安を持ち、見るもの聞くものが全て新鮮に感じられ、自国との急激な環境変化にできるだけ早く適応しようと無我夢中になっている。周りの人々に対して配慮するだけのゆとりがない。また、本人が不適応になっているゆとりもない。異文化に対する受容力と適応力が著しい時期である。

2. 不満期 入国期の混乱や緊張が一応収まり、日本で生活していくための衣食住の条件は何とか整い、学校での対人関係にもやっと一通り慣れてきて気分的にはあった頃からは始まる。この時期が精神的にはもっとも問題で、不適応の発生しやすい時期なのである。

今まで無我夢中でよくわからなかったが、日本に関する欠点が段々見え初め、不合理さや不便さ、不自由さが次々と気になり始める。特に来日前に日本を理想化していたり、日本留学に対する期待が強い程、日本に関する欠点が外の人よりもクローズアップされて見えてくる。何でも本国と日本とを比較してみるようになり、一事が万事、不満でたまらない、いらいらやあせり、易怒性などが出て無性に腹立たしいという時期である。

3. 諦観気 不満期を終えると、諦観期がやってくる。この時期に、留学生は日本というところはこんなところなんだとか、日本人というものはこの程度のものなんだとか、この程度で仕方がないだろうと諦め、あるがままの日本の素顔を直視し、現状をそのまま受け入れるようになる。学習者なりに一種の諦めと悟りの境地に至るわけである。

4. 適応期 無理なく日本での生活を楽しむことができる。日本の長所も短所もよく分きまえ、日本で生活し学習している自分自身の位置付けが客観的にでき、その場その場の状況に合った適切な対応が可能になる。それに日本社会に適応し過ぎて、自国の文化を蔑視したり、日本人になりきろうと「過剰適応」が生じる場合もある。

5. 望郷期 最後の段階として望郷期が来る。一端適応期に達したら、あとはその状態がいつまで続くかというとは必ずそうではない。その後、本国へのノスタルジアが強まり、それに支配される時期が来る。と。

この日本語教育者の鋭い分析に感心した。振り返ると、自分は確かにそういう心境の変化の道を進ってきたのである。

日本に来たら、きょうまく勉強できるし、沢山の友達ができるとずっと綺麗な夢を持っていたわたしですが、日本に来て第一年目に挫折感や寂しさに襲われてストレスがたまった結果倒れてしまった。その時、言葉はかなり不自由なので、授業中、先生に質問されても思うままに答えられず、自分はなんでこんなに愚かな人であろうと落ち込んだり、金髪の人しか目を向かなく、いつも知らん顔をする日本人の学生の冷たさに傷付けられたりして、留學生活に対する憧れは半分目覚めてしまったような気持であった。まあ、諦めよ

うと思い初めてこそ、尋常の気持で日本人の学生と接することができるのである。

一年後輩のタイの留学生の話ですが、彼女は一年目によく口にするのは「私には日本人の友達是一人もいない」という言葉であった。また、もう一人のオーストラリアからの後輩は、最初皆とかなりうまくやっていたようであるが、ある日図書館で彼女に会って、最近本当の日本人の友達がいるかどうか分からなくなると彼女は文句をこぼした。もちろん、それは個人の性格や異文化のやり方の相違より生じたギャップであろう、一番関係深いのは恐らく外国に置かれている留学生の心の脆さであろう。日本のマスコミはよく適応期に達する留学生の話をするが、実際に、自国の人ばかりと付き合っ、日本人の団体に入ろうとしない留学生もよく目にするのである。こうした留学生にとって経済援助よりも彼等の微妙な心理を理解してくれる暖かい目差しや心遣いが肝心であろう。

今から考えると、日本ででの生活に馴染んでくれたのは、豊中公民会館で知り合った奥さんたちの影響が大きかった。学校の先輩や友だちもいろいろ教えてくれたが、アルバイトや勉強で忙しかったりするから、何か悩みがあっても相談の相手になってもらえない。奥さんたちとは年が離れているが、自宅へ遊びに呼ばれたり、日本の茶道や華道などを教えてくれたりして、まるで異国の母親のようで暖かい思いを持たせてくれた。いまでもお互いの交流を続けている。

日本は今年で四年目です。奨学金に恵まれたので、勉強に専念でき、ゆっくりと日本を見る心の余裕もある。日本ででの留学生生活を順調に送ってきた自分は運がいいと常に思っている。但し、いつも残念だと思うのは、経済大国日本の脈動を感じられないことである。学校生活に明け暮れ、日本人の家庭に遊びに行ったりもするが、範囲はかなり限られている。テレビ、新聞などのマスコミから一応情報を得ているが、実感はない。チャンスがあれば、学校以外の日本社会も見たいなと思ってきたから、今年の二月に修論を出した後、少し余裕を得たので、しばしばアルバイトをするようになった。出版社の翻訳の仕事とか、塾で講義をするとか、いずれも勉強になった。その上、学校以外の人達と接触して、日本社会との触れ合いは深くなったような気がする。

今、困っていることの一つは、長い間日本にいるから、日本の色に染められてしまったことである。台湾へ帰る度に、日本人の雰囲気をしているとよく言われる。また、礼儀正し過ぎるよ。変わっているよと友だちにからかわれたこともある。私自身は別に良くないと思っていないが、環境が人間に与える影響の大きさをもう一度見直した。

留学ということは、決してある期間にある国で勉強をするだけのことではないと思う。度合いは違っても、留学生たちが無意識の間に染められたその国の色は身の一部分となり、その国との無形の絆になってしまうのである。

日本に来てから、大勢の人に出会い、いろんなことに遭遇し、その一つ一つはみんな成長の力になった。博士論文を出してから台湾へ帰るつもりなので、日本はあと二年余りである。この先、またどんな人、ことに巡り合うか分からないが、今と同じように「一期一会」の心構えで大切にしていこうと思う。



「ハングル」とは

米山奨学生学友会（関西）

大阪府立大学代表 鄭 錫 賛

大阪府立大学工学研究科博士課程

ハングルと言うのは、ご存じのように英語の「A・B・C…」を「アルファベット」と、日本語の「あ・い・う・え・お」を「ひらかな」と呼ぶように、韓国人が現在使用している韓国固有の文字を名付けてハングルという。日本語では、漢字で表せる言葉もあるが、漢字では書けなく「ひらかな」でなかったら、表せない言葉もあるように、韓国語でも、韓国独特の言葉、すなわち、漢字としては表せない言葉と漢字を借りて韓国語式で読む言葉でできている。例えば、韓国のソウルは純粋な韓国語で、漢字では書けないが、釜山は漢字で表現できる。ここでの、ハングルも韓国独特の言葉、すなわち純粋な韓国語であるから、漢字では書けない韓国語である。

ハングルとは、ただ単に韓国文字の名前だけではなく、それ以外にもいろんな意味を含んでいる韓国語である。

ハングルのグルは、文や字、文字、文章などを読む韓国語であるが、ハンには、さまざまな意味を持っている。それを挙げて見ると、

- (1) 韓国を韓国語で読むと「ハングク」と読むから、韓国を表す「ハン」
- (2) 韓国語では数字の「一」を「ハナ」と読んでいる。すなわち「始まり」または「一番」の意味としての「ハン」
- (3) 韓国のソウルには、漢江（「ハンガン」と読む）がある。漢江を直訳すると、大きな川である。このように無限大なこと、すなわち非常に大きいことを「ハン」という。
- (4) 韓国語で神様を「ハナムム」という。このように「偉大な」の意味として
- (5) 真っすぐ、正しいを示す意味として

等がある。これからハングルの歴史について簡単に述べると、

現在、世界には1000以上の言葉があって、56種類の文字が使われていると知られている。言葉と文字と言うのは、時代の流れと共に変化するのは自然的なことで、大部分の文字はもとの字形はわからないことが普通である。しかし、ハングルは歴史が短いせいもあるけど、ほとんどが最初の字形を今でもそのまま使用している。それほど、最初に創製された文字が完璧であるとも言えると思う。

13世紀末、中国では「元」の時代が終わり、「明」の時代が始まった。その「明」から輸入された儒学を勉強した学者、すなわち儒学者たちが朝鮮建国の主役であった。その朝鮮の4代目の王様で、世宗（「セジョン」と読む）大王という非常に賢い王様がいらしゃって、この王様は韓国人が一番尊敬する偉人である、新しい文字の創製の目的で、王立研究所（集賢殿）を設立し、そこに同時の優秀な学者を集めて一緒に研究した結果できたものがハングルである。そのときには、儒教が学問的に成立段階であり、これを研究する学者が多いときであった。

ハングルの創製は、世宗25年（1443）12月に始まり、世宗28年（1446）9月に公表され

た。記録上では、やく3年間の業績であると書かれているが、ハングル創製の作業が始まったのはもっと前だという国語学者もおる。ハングルの公表したとき、ハングルの創製動機、目的、創製した文字の使い方などを書いた、ハングルを使うための一種のマニュアルみたいな本と一緒に公表した。その本の名前が、「訓民正音」であるが、これがハングルの最初の名前である。「訓民正音」の意味からわかるように、ハングルは「百姓を教えるための正しい音（言葉）」の意味をもっている。

この「訓民正音」の本の最初の部分に、創製の動機、目的が書かれているが、これを訳して見ると、「国の言葉が、中国と異なって、一般の百姓が自分の意思を表そうとしても、できないことである。このことを、かわいそうだと思い、新しく28字を作ったから、易く学んで、日常生活に使うようにする」である。ここからわかるように、ハングルは、自分なりの自主精神、百姓を思う愛民精神、生活に有益な実用精神が含まれている。

韓国は、文盲率が非常に低い国であるが、これもハングルが学びやすいことではないかと思う。また、最後に加えたいことは、ハングルの文字数は、創製当時には、子音17個、母音11で全部で28個あったが、いまは、子音14個、母音10個で24個である。日本語は「ひらかな」「カタカナ」合わせて102個であり、英語も4種類で全部で104個であるが、ハングルはただ24個だけである。この面で見てもハングルの優秀性がわかることではないかと思う。



ほしいけれどもできないのか

洪 徳 俊

神戸大学大学院

一般に、私たちは自分の国より優れたものを持っている国に留学する。留学には、2つの目的があると思う。1つは、自分の国より優れた科学、文化などを勉強すること、もう1つは、自分の国と異なった自然、習俗などを見学することである。

「Made in Japan」というマークは、低い価格且つ良い品質の印である今日、日本的経営は世界各国に注目されている。日本製品を買うより、日本技術を習って作るほうがよいのは当然だ。しかしながら、日本技術を習えば習うほど、それがほしいけれども持ち帰れない。市場規模、技術格差、文化相違などマクロの環境にもとづく生産技術が違う。日本技術の強さであるトヨタ生産方式の基礎原理は、現場尊重と絶えざる改善であり、日本で生まれ、育ったもので、ほかの国へ移転し、培えるものではないのである。しかしながら、1つの物は、いろいろな方式で生産できる。「他山の石」として、日本技術を学んで、自分の国のケースに従った生産技術に応じて、ある程度改善に役立てることはできると思われる。

私の子供たちは、保育所へ行くようになってから、毎日毎日子供の服や毛布などをたくさん洗う妻は、大変な苦勞だ。私の子供の生活を見て、それがすぐ分かった。子供は自分で服をたたみ、着て、物を食べる時タオルを使い、汗が出て濡れた服を着替える。少し水で濡れた服を必ず着替えるのは、私の子供の「くせ」かもしれない。夏に3日間、使う毛布などは、全部洗う。だから、妻は苦勞だ。しかし、この点だけで、日本人の清潔さの重視が分かった。生活の清潔さの概念から、良い品質を追求する。皿や茶碗をきれいにし、包装に注意し、住宅環境を爽かに、工場や職場で、5S（整理、整頓、清掃、清潔、躰）を励行している。これだけでなく、日本人は清潔さの観念を自然まで広める。重要文化財、国立公園などは、法律で保護される。しかし、日本人は自分の自然を守るが、世界のほかの国の自然（森林、鉄鉱など）を破壊することもある。

このように、自分自身の清潔を追求することは、誰にもできるはずである。それにもとづいて、自分の仕事の態度を効率的に且つ効果的に行なうことが大切だ。それが自分の国の人々にも影響を及ぼすことになると思う。もちろん、われわれは、日本人のようにあちこち温泉に入る必要はないし、わざわざ、日本に来て、珍しい秋芳洞へ行き、古めかしい明治村を観光し、おいしい六甲の水を飲む必要もない。どの国でも、水、空気、太陽がある。われわれは、自分の国の自然を守るか否か。

本題に戻って、留学生としての私たちは、先進国である日本の社会現象を見て、大きなショックを受けるはずだ。なぜ、日本は自分の国とこうも違うのだと思ったら、留学の目的は半分以上達成している。残った課題は、いったい、自分の国が直面する問題は何かということである。日本で、学んだ事を自分の国の問題にそのまま適用するのは不可能だ。日本の社会や技術の基本原理の中で、一部でも、自分の国の改善に役立てたら、留学の目的は、円満に達成したと言えるだろう。

「二つの提案」

韓 三 建

京都大工学部建築科西川研究室修士2回

この頃日本の物価が高いことを報じる新聞記事をたびたび読んだ。それは新聞の漫画にも登場するようになったし、経済面にはほぼ毎日のように1段記事からなんとかの特集まで物価高の話は人々の関心の大きな対象になっている。今日(7月25日)の朝日新聞朝刊にも出たように日本の牛肉の値段がニューヨークの4倍、タクシー料金は世界一高いと言うのもこういう物価高の報道記事の一つである。

国の経済の規模と質のことで直接比較できないかもしれないが、韓国と日本を比べて見ると、市バスは6倍、タクシーは3.5倍も日本の方が高い。そして学生生活に欠かせない本や文房具も平均2倍以上なのである。ともかく電気、電化製品以外は2倍以上日本の方が高いと思われる。このように世界でも有名な日本の高物価と、何年か前から始まった円高による二重の物価高は私たち留学生にとっても大変なことなのである。こういう事情で留学生が、お金の苦しんで何の余裕もない生活をするのは留学の意味を半減させることだと思う。若い頃、苦しみながら勉強するのもいいけど、ある意味では自分の国で大学以上を卒業して、より高い技術、学問、理想を求めて日本までやって来たもんだからなるべくよい環境で勉強できるのも悪くはないことだと思う。もちろん、よい環境というのが決してぜいたくを意味するのではなく、勉強の環境、そして日本を理解し、日本を学ぶためのよい環境を言いたいのである。

高物価と円高の国日本で暮らしている私たち留学生のためにここで次の二つを提案したいと思う。一つはJRパスのことで、もう一つは空家のことである。まず、JRパスは韓国を例として上げると観光VISAを持っている人のみ1週間または2週間単位で買うことができる。それを買うと1週間の切符が約2万6,000円ぐらいで、これ1枚を持っていると1週間新幹線自由席、一般線、JRバスが乗り放題になるのである。残念ながら4-1-6 VISAを持っている我々はこれを利用するのができない。JRに聞きたいのは、もし営利が目的だったら1人でも利用できるように留学生にもこの制度を開放してお金をもうけるのが企業のやるべきことだと思うし、もし外国人観光客に対するサービスの気持だったら去年1年間日本を訪れた人が第1位の国だけで80万人を登っているのに、わずか3万人程度の留学生に対してこの制度が適用できないとそれは矛盾だと思われる。日本を学ぶために来た留学生が自分の下宿と研究室だけを往復してようやく学位を取って国へ帰っても日本の何が理解できるのだろうか。旅行といういい経験を積み重ねて体で日本を理解できるようそういう道を留学生に開けて欲しい。もちろん、一部大学には旅行プログラムもあるし、ホームステイなどもあるが、それは限られた人数しか参加できないのが現実だし、何よりも生活に苦しんでいる留学生が自分が行きたい所に自由に行けるように協力して欲しい。

二番目に提案したいのは、空家の活用方法である。今、日本はものすごい地上げの熱風で巻き込まれてマンションも一般住宅も空家が多い。それは地上げを待つための空家と経

済的な余裕によって家を持っている人がもう1軒家を買って転居し、空家のできたのがある。こういう家が空家になっているのは持ち主が近い将来、売買または建て替える計画で、もし人を入れると追い出すのがむずかしいからだと思われる。しかし、建物というのは空家になるとすぐ崩れてしまうので建物の維持・管理のためにも人を住ませる必要がある。また、空家が増えると町の雰囲気も悪くなるし、夜には町が暗くなってよくない。

留学生は勉強が終わると自分の国へ帰るから家を占拠される心配もないし、むしろこういう部屋を貸すのによって家にもいいし、人に対する思いやりと真の国際交流にもつながる早道になることを信じたいと思う。



日本現代工芸の随想

張 国 清

京都市立芸術大学

日本は私が心を引かれた国です。その花への感情、色彩に富んでいる絵、水流のような繊細情感、東の小島のやさしさ、そして同じ黄色い顔をしている人の人情味はすべて好きです。それだけでなく、経済が発展しているために、この土地はもうすでに現代文明におわれているのです。来日以前、日本の伝統的な文化に感動したことがあります。とくに浮世絵、伝統的な日本画はみな私の頭の中に日本文化のイメージとしています。現代の文化と伝統の文化がどういうふう結合されているか好奇心をかかえて……

私が中国で北京中央工芸美術学院を卒業し、西安美術学院工芸専攻の教師として、母校に漆工芸設立のために日本へきました。1989年4月から京都市立芸術大学（大学院）漆工専攻に入学しました。専門は漆工ですけれどもこの二年間もっとも注意を注いでいるのは日本の現代工芸です。

日本現代工芸形式の各種の作りものは、伝統の厳しさを守っている。しかし現代の時代様式も大切に追求しています。この点が日本現代工芸の生命力だと思います。日本には工芸芸術作家の多いことや、芸術家の団体、ある個人工人の多いことにおどろきました。学術交流では皆な自由に自分の見解を発表できる、こういった広範囲の交流はまちがいなく日本の現代工芸を促したと思います。ほかの面については日本と世界中いろんな国との文化や民族芸術交流も重視しています。ヨーロッパ現代の芸術のすぐれたものを吸収して日本の現代工芸は発展しました。例えば、周知のように工芸の中には漆工があり、それは東洋しかないもので、昔、中国から伝わってきたが日本が中国古来の伝統的手法漆絵などを取り入れ単一な技法から多種多様な手法を生み出して、長期の実践により、従来の漆工芸より高質でより工芸美的な新しい価値を作り上げ、それによって、日本伝統工芸の独特なスタイルを作り上げた。特に近代以来、日本の専門家たちは工具、材料、工芸技法などの研究に努め多くの新材料を利用し、新しい表現手法をつぎつぎと創造して、その芸術性をより一層深めたと思われる。もう一つ感心しているのは、日本現代工芸における教育のレベルは高いと思います。それは学生は自由に創作し、個性的に新しい素材と技法の研究が自由に表現できる為に教室で作品の制作に頭のイメージから各自の手で作品を完成する。その過程は現代工芸では非常に大切だと思います。

芸術の世界性はある一定の民族の素因があるということがいえます。日本の現代工芸芸術は現代の方向に行っているけれども、作品にはまだ大和民族の気質が見出されます。アジアとヨーロッパ人の気質の違いそして日本の伝統文化の影響でその作品にも日本人の意識が伝わっています。現代日本版画、彫刻、陶芸、漆工芸などはすでに世界の先端をいっています。

私のロータリー奨学生としての二年間の勉強は私の視野を拓けました。日本は大きな窓のようでそこから私はすばやく発展している世界の美術工芸を認識して、日本で現代漆工の研究のために新しい材料の使用法、漆工諸技法を実験研究しながら、自分の持ってい

る個性と技術を結びつけて、芸術創作活動として、できるだけたくさん作品を制作します。私は国へ帰って、志のある同志と一緒に中国の現代漆工芸の発展に力を尽くしたい。もっと人を驚かせるような良い作品を作りたいと思っています。





日本と韓国の 産業技術に関する一言

崔 桓

大阪府立大学工学研究科博士課程

私は韓国から日本に来て2年位経ちました。日本に来てから私の心中に、いつも考えていることは日本人と韓国人は顔がほとんど似ていて、天然資源がたいていないことも同じであり、同じ儒教国家であるが、なぜ、日本が韓国よりも豊かに暮らし、世界中に2、3位の先進国になったのかである。

それについて言えば、いろいろな面があると考えられる。私が日本に来て生活した期間は短いものであるが、私の専門に一番近いところである産業技術に関して、これから私が感じたことと経験を中心に述べようとする。

今年まで卒業したうちの学生たちの大部分は各々の企業の現場に配属された。私は学生たちの勤務先について関心が高いので、“勤務先が現場でどうですか。”と聞いてみた。学生たちの中に“私は事務室よりも現場が好きです。”と答えた学生が非常に多かった。

なぜ、日本では現場が好き人が多いかを歴史的に考えると、現在の日本の現場優先主義は700年間続いた武士階級による支配に、そのみなもとがあると思う。武士政権が長く続いた日本では文よりも武が尊敬された歴史から見ると、武の基本は、自分の体を動かすことであるので、自分がやって、あせをかくのを美德とする思想が社会全般的に生じ、上層部においてもそのような価値観となり、肉体労働を無視する風潮があまりなかったと考えられる。

しかし、韓国では1000年ほど前、高麗時代から、中国から科挙制度が導入され、次の時代、李朝時代では完璧な文官支配の時代になった。そして、上層階級では自分の体を動かし、手を汚す習慣がなくなり、肉体労働により生産することが社会全般的に高い価値を持つことがどんどん消えて来た。李朝500年の停滞的な文官支配の長い期間が商工業の発展に悪い、大きな影響を及ぼしてしまった。その影響によって体を動かすより、頭を使うこと、つまり、行動よりも論理を優先する傾向が社会全般的に広がった。韓国では論理を優先する社会になったので、明治開国後、技術面に急激に発展した日本に比べ、韓国の技術発展が大きく遅れた重要な原因になったと考えられる。

韓国は1960年に入ってから、政府の積極的な経済成長政策によって、加工貿易による輸出に重点を置き、重化学工業に大きなウエイトをかけ始めた。重化学工業の基盤がゼロからの出発であったので、外国から技術、資本、生産管理、経営管理まで導入し、開発より生産中心として、工業を今まで発展して来た。

それを支えるのは韓国人の勤勉性、教育水準の高さ、いい暮らしに対する強い意欲であると考えられる。

韓国は外国からの技術導入によって工業発展が進められ、また、政府が中心になって技術開発も行った。そして、企業の技術開発力が弱いものであり、研究機関、研究員が小規模であったため、現在は海外からの技術導入にいろんな問題が生じ、海外の技術依存度を減少するため、自体技術開発に多い投資を行い、技術開発に努めている。

現在の韓国も国民の意識が早い速度で変わってはいるが、伝統的に現場を事務室よりも優先する風潮をあまり持たない状態であると考えられる。産業技術というのは「頭を使うより、まず、体を動かす」ことにより、つまり、手と体を動かして得られた経験を通じて、蓄積されるものと考えられるので、韓国の技術面に関して考えると、現場優先への社会風潮の変化、技術の発展と蓄積に頑張るべきであろうと考えられる。





中国人の私にとっての日本語の発音に関する難点

蕭 春 蓮

大阪府立大学総合科学研究科修士課程

普通のルール（日本に行くことを決めると、最初に「日本語を勉強しなければならない」ということを必ず考えます）と違って、私は日本に来る前、日本語をあまり勉強しませんでした。結局、予想通りにカルチャーショックを受け、しかも、今でさえしばしば「in-articulate」の状態で大変です。

修士の一年目で、指導教官のおかげで、音声学（phonetics）という学問を少し勉強しました。音声学とは人間の音声を研究対象とする学問です。人間音声の主要な用途は、言語による伝達にあるので、音声学の中心的課題は言語音（speech sounds）の研究ということになります。

一、まず音節（syllable）から見る日本語と中国語

日本語の音節は単純だと言われているそうです。構造上から見ると、皆ご存じのように清音、濁音、半濁音と拗音に分類されている

○ すなわち

- (一) 1母音からなるものーア行の音。例えば え/e, お/o
- (二) 1子音と1母音からなるものーカ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラの各行。例えば から /kara, まで/made, 空/sora
- (三) 1半母音と1母音からなるものーヤ行とワ行の音。
- (四) 1子音と1半母音と1母音からなるものーキャ、シャ、ニャなどの音
- (五) 特殊な単音からなるものーン（はねる音）、ツ（つめる音）、ー（ひく音）という形からできるもの

この中で一番複雑なものでも、(四) 番の三音構成です。そしてすべての発音は、母音の後に、もう他の音は来ません。口を開いて終わるということで、手っ取り早くいうなら「母音どめ」です。つまり、日本語は「母音どめの言語」です。

中国語は母音どめと、子音どめがあります。「都/du」もあるし、「冬/dong」もあります。

中国語の音節は、北京の標準語について言えば、他の方言に比べると少ない方だと言われますが、それでも魚返善雄の勘定では411あるそうです。英語のは中條修によると30,000を超えると言われています。金田一春彦による日本語の勘定は114の音節があります。この数字は世界の言語の中で極めて少ないということです。

二、音素（phoneme）から見る日本語と中国語

日本語の音素は樺島忠夫によると次のようになります。

母音：a, i, u, e, o 半母音：j, w

子音：k, g, s, z, t, d, c, n, h, p, b, m, r, など

モーラ音素：N, Q

これは中国語に比べてどうでしょうか。日本語でカナは1字が1音節ですが、中国語では漢字1字が1音節。そして中国語では、音節の冒頭にある子音を「声母」と言います。日本語を例にしていえば、〈カ〉はローマ字でkaとつづるが、kaは1音節で、その冒頭にある「k」が声母です。中国語の声母は全部で21あります。(例えば、b, p, m, d, t, n…)

日本語の母音 (vowel) は「a, i, u, e, o」の五つで、世界の言語の中では数の少ない方だそうです。千野栄一『言語のたのしみ』によると、フランス語には16もあり、韓国語にも11あるそうです。

日本語の母音の中で、特色のあるのは「u」です。つまりヨーロッパ語や中国語などの「u」と違い、必ず唇を突き出すということはしません。日本語を知らない人に「見」せると、何となく不思議に感じると思う。というのは、口を開かないでしゃべれるわけです。本当に「閉ざされた言語」でしょうか。

14種類の子音を持っている日本語が、純粋な摩擦子音は「s」「n」の二つしかありません。流音も一つ一ラ行です。普通は「r」とも「l」ともつかぬ音で発音されます。イギリスの音声学D・ジョーンズ (Daniel Jones) の「音韻」という本では、次の例をあげており、日本人の「アイ・ラブ・ユー」は、英米人には「私はあなたを擦ります」と聞こえるそうですが、私にもときどきその言語が英語なのか、和製英語なのか、一瞬迷うことがよくあります。

中国語の音声学と比べると、日本語のそれはかなり単純なのに、私個人にとってやはりたくさんなかなか克服できない点があります。

第一 アクセント (accent) の問題

日本語では「飴」と「雨」は、「ア^マ」、「ア^メ」のように、また「箸」と「橋」は、「ハ^シ」、「ハ^シ」のように発音され、「高さ」の違いによって意味が区別されます。つまり日本語のアクセントは、語(または文節)内部における高低の関係が決まっている高低アクセントで、高低の違いによって意味の区別をしたり、語のまとまりを示す働きをします。またそのアクセントは、語や文節の切れ目を示す機能もあります。例えば、

ニワニワニワトリガイル (庭には鶏がいる)

ニワニワニワトリガイル (庭には二羽鳥がいる)

ニワニワニワトリガイル (二羽、庭には鳥がいる)

またアクセントの型は、「平板式」と「起伏式」の区別もあります。「起伏式」はさがりめの位置によって、「頭高型」、「中高型」、「尾高型」の三種類に分けることができます。それだけでもずいぶん複雑なのに、更に各地の方言によってそれぞれの体系があるそうです。例えば、東京方言(標準語?)と京阪方言のアクセントは大分違います。大阪で留学生活をする私にとって、日本語学校で教えられた言葉は、標準語なので、普段よく耳にする言葉と違い、よく混乱しています。

第二 清音 (voiceless sound) と濁音 (voiced sound) の問題

例えば、「顔」という文字は、顔/kao、丸顔/marugao、「酒」は酒/sake、甘酒/amazakeのように各々の場合に発音されます。原則上では複合語をつくる場合に、いわゆる「連濁」の現象がありますが、今の日本語では次第に混乱しているようです。

例えば、靴下は「クツシタ」と発音すべきと思うんですが、実際に「クツシタ」と読んでいます。

東方「トーポー」は「トーホー」となります。

三陸「サンガイ」は連濁しないで「サンカイ」となります。

天下は昔の「テンガ」から今の「テンカ」に変わります。

一体どちらが正しいでしょうか。

そして学校の「ガ」の発音については、「ŋa」(鼻音)と「ga」(喉音)の正しい使い方や聞き取りも私にとっては問題になります。

第三 音節 (syllable)の区切りと拍 (mora)の問題

音の長さを表わす時間の単位を拍といいます。音節は区切り、つまり「聞こえのまとまり」の単位です。日本語の拍と音節とは、例えば、「ニッポン」の音節を区切ると、「ニ・ッ・ポ・ン」ですか、「ニッ・ボン」ですか、「ニッ・ポ・ン」ですか、何拍ですか。今までの理論的な了解によると2音節4拍ですが、実際に話せばなかなかつかみにくいです。

第四 「チ」と「ツ」の濁音の発音問題

本や日本語の先生から「ち」の「じ」の発音は「ji/dʒi」と、「づ」と「ず」の発音も「zu/dzu」と教えられました。実際に発音を詳しく研究すると、その「u」の発音は「tsu」の方が似ています。

例えば「つづく/tsuzuku」と「五つずつ/itsutsu-zutsu」の「u」の「はく/haku」、「そく/soku」とかなり違って、普通の「u」の発音より強く発音されます。私にとってそれを単独で発音する際には、問題ないのですが、連続に発音する場合、なかなかうまくいきません。あがったら、もっとめっちゃうちゃになってしまいます。

第五 イントネーション (intonation)とプロミネンス (prominence)の問題

イントネーションとは、感情的と論理的と二つに分けられ、発話中、話し手の表現意図を表わすために文末などに現われる声の抑揚の姿と定義されています。普通、イントネーションは上昇調 (↗) は疑問、念押しの気持で、下降調 (↘) は断定、命令の気持で下降上昇調 (↗↘) は驚き、感嘆の気持で、そして平板調 (→) は言葉がまた続くことを表わします。そして文の途中のある部分(語、語句)を強調するために、その部分を高くあるいは強くもしくは長く発音して際立たせ、文の意味を明確にする働きをプロミネンスと呼びます。アクセントは社会的な習慣性が強く、各言語(方言)に固有な存在ですが、イントネーションとプロミネンスとは社会的な習慣性は概して弱く、その特徴は多くの言語(方言)にある程度共通に認められるものが多いと言われています。

特に日本語の世界はあまり物を言わず、そのまま曖昧にされている場合が多いので、ときどきイントネーションとプロミネンスのつかみ方が違い誤解されることもよくあります。

われわれの日常のコミュニケーションにとって、音声は欠かせない存在です。人間は言葉を操ることのできる言語能力を持って生まれてきますが、その能力を十分に発揮させるためには、何よりもまず言語音声の習得が必要です。それは外国語の学習にも同じことが言えます。ちなみに、母国語と外国語の音声や発音の異同を比較・対照することによって、彼らの音声構造や音韻体系の違いを的確に理解し、それを学習に利用することで、更に異文化を理解できるようという効果もあります。

私にとって日本語の発音はなかなか難しく、常に勉強、反省の毎日ですが、少なくともアメリカの学者Bernsteinのいうような「文化的阻隔児 (under-privileged)」つまり言語障害にならないようがんばります。



なぜこの女が 建築をやっている？

齊 慧 芸

大阪芸術大学建築学科4年

建築がまったくわからずに大阪芸術大学の建築学科を選んだのは、「建築学科は人間を学ぶ場である」の一言を見たからなのであった。

「建築」と言えば、先ず頭に浮かぶイメージはたぶん建物を設計して建てることだと思う。だけど私はタテモノを建てない。タテモノを建てたくない。タテモノを建てる方法がわからない。じゃ、この三年半、一体何をやってたのかと聞かれたら、答えは一つしかない。「人間の空間をつくることによって、人間を学んでいた。」

「人間の空間」と言ったら、あんまりにも抽象的だと思う。だが、誰にも一度位、ある空間に於いて感動したことがあるだろう。カトリックの信者の私が教会に入る瞬間、心の安らぎを感じるのと同じく、自然の好きな人が山の中の木造小屋で感じた気分も、生きている自分の存在を感じさせてくれて、人間的だと思う。

ほんの三年余りしか建築のことにふれていない私にとって、建築ということはやはり人間と同じように中から生み出すものであると思う。外の面白さしか持たない建築は人に一瞬の楽しさしか与えられない限り、感動させることもできず、時間の衝撃にも耐えられないだろう。内在の豊かな人間とこそ、長くつきあえばつきあうほど、その人の人間性、深み、そして独特な個性が見えてきて、お互いに思考の刺激を与えながら、より意味深い充実な面白い人間になれると思う。建築とのつきあひも、こういうふうにできれば、いいなあと思っている。

建築はどうあるべきかを述べているのではなく、むしろ私の建築はどういうふうにありたいかを言わせて頂こうとしているのである。私はこの三年半やってきた建築設計課題が、それぞれによって私自身から友達に一つ一つのメッセージを伝えようとしていた「語る建築」とも言えるだろう。設計課題のテーマによって、コンセプトから図面、模型、そしてプレゼンテーションを通じて、一つのメッセージを伝えようとしていた。メッセージが伝わったかどうかにかかわらず、自分の作品によって、自分自身を考えさせながら見てくれる人にも私と一緒に考えてもらえたら、それなりに成功していると思う。成果は点数や評判にあるものではなく、作品製作過程で得た一つ一つの知恵の実（というものでしょうか？）であると思う。この実によって、周りの人と一緒に刺激させあいながら、やっていきたいし、やっていくべきだと思う。

今まで自分の設計したものを一つも実現したことがないが、実現させたいとも思っていない。なぜなら実現したものがどこまで感動させることのできるかを考えると、自分の設計のものたりない所がわかってくるし、本当につくることの大変さも考えなければならぬ。そう簡単にはいかないから。だが、学生も人間としての宿命がある。未来への準備をするというより、先ず今、この瞬間、人間としての責任をはたすことが目の前のことであり、それこそできれば十分だと思う。だって、どんなに大きな夢でも、小さな行動からなんだから。私にとっては建築家になろうか有名人になろうかという単なる職業的な問題よ

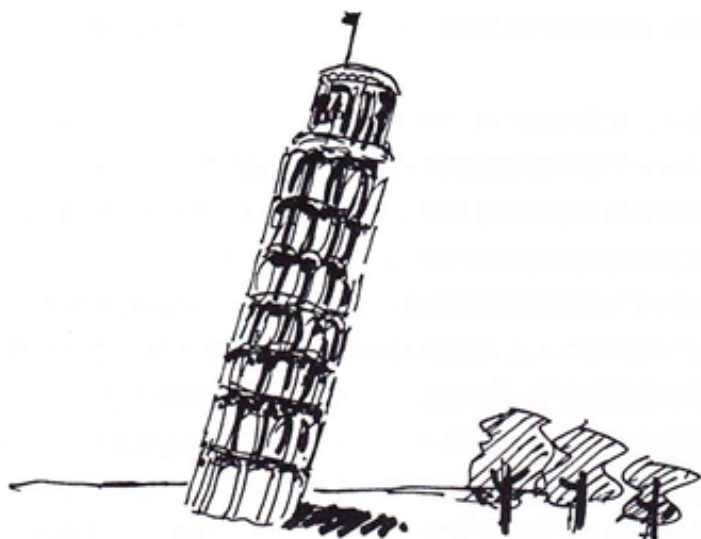
り、人間としての性格の完美さというか成熟さというかを求めたいのである。

「建築」って、私がどう生きていくべきかと考えさせてくれて、まさに私の親である。親に対して、人間に対して、建築に対しても同じく、なによりもどう「感じる」かが一番大切だと思う。頭を働かせなければならない。親も人間もそして建築も、見るより、感じる。見たいと思っても、目で見るとは、心で見てもらいたい。

女である私が、親に勉強させていただこうと思えば、できないことはない。

女である私が、人間であれば、建築を学ぶことはできないことはない。誰でも建築を学ぶことができる。だって、人間だもの。

1990年9月26日





私の専攻 — 21世紀に向かう宇宙開発 —

崔 慶 昊

大阪府立大学工学研究科修士課程

I 人類が人工の物体を地球の衛星にしたのは、今から33年前であり、この30年間で技術は飛躍的に進歩しており、2000年までは本格的な国際宇宙ステーションが完成し、人類の宇宙への進出もより実現されるであろう。米国は宇宙ステーションを完成しそれを中継基地とする月面基地・火星有人飛行計画の構想を発表した。

ブッシュ米大統領は、1990年5月3日、テキサス大学での演説の中で「これから30年の間に人類は他の惑星に立つであろう。…、私はアポロの月着陸の50周年を祝う前にアメリカ国旗が火星に掲げられるべきだと信じる」と述べている。これらの計画は、米国一国のみで実行すべきではなく、日本・欧州及びソ連への参加の呼びかけが必要であるといえよう。

宇宙開発は、従来各国の中で特異な位置づけにあり、宇宙開発促進の根底にあったものは、フロンティア精神と国家間の開発競争意識であった。また、宇宙開発そのものも米・ソ主導で展開されてきたが、欧州の台頭、中国の打ち上げ市場参入など近年の動きは宇宙開発の多極化を示唆するものである。

日本においても宇宙開発は順調に進んでおり、宇宙開発事業団 (NASDA) が開発を進めているH-IIロケット、技術試験衛星型 (ETS-V) など世界水準に達しつつある。また、国際宇宙ステーション計画に参加する日本実験モジュール (JEM) の実現によって日本の役割が大きくなるであろう。いまのところは通信衛星、放送衛星、気象衛星、地球観測衛星および宇宙実験などが実現でき、人間生活の様々な分野に貢献している。今後、これらの分野はさらに発展して行くであろう。21世紀の宇宙開発の主な目的は、地球上に起きている食料やエネルギー及び資源の不足、そして環境の問題などを解決し、人類がいままで以上に進歩するためにある。

II 科学技術は社会構造の変化をもたらし人類の生活向上に貢献している。一方、社会活動の拡大にともない、環境破壊に象徴される全地球的な規模の環境変化をもたらす弊害を生みだしているのも事実である。

このような社会情勢にあって、宇宙開発への期待は大きなものとなってきている。宇宙開発は本質的に人類の活動領域を地球からより離れた空間へ拡大するものであり、この点において従来の科学技術の枠を越える特異性を持っている。すなわち、科学技術の発展を続けて行くには、いまや、地球は狭すぎるものである。宇宙に向かって展開していく事によって、地球の安らぎが戻ってくるのではないかと考えられる。宇宙開発はこの本質的な特徴を生かして、科学技術の発展を進め、安全で、より豊かな社会及び国民生活をつくる事に貢献するものである。宇宙の特質の一つである、高真空・微小重力環境を利用する計

画がある。微小重力環境は地上では得る事が困難であり、宇宙を利用したシステムが唯一本格的な手段を提供し得るものである。宇宙環境特性を利用して製造された新材料、医薬品及び生命科学に関する研究などは、人類の福祉・社会生活において飛躍的な変革をもたらす可能性を持つものである。

現時点においては世界のエネルギー事情は一時的に安定しているかに見えるが、化石燃料や原子力燃料は有限であり環境破壊を抑制するためにも、化石燃料などの使用は限界があるものである。エネルギー・資源のない日本としては、将来に向けてのエネルギーの安定確保を図る事は重要である。宇宙では太陽エネルギーを始め、月・惑星資源の利用が可能である。

例えば、太陽エネルギーが地球上ではその大半が雲で反射されたり大気に吸収されたりして1%位しか利用できないが、宇宙では常時100%利用でき1㎡につき1.4kwのエネルギーが得られる。この量は、日本の一人あたりの電力使用料が0.5~0.7kwであることを考えると、太陽エネルギーがいかに豊富であるかが理解できる。21世紀には、資源・エネルギー・人口増加の問題などを解決するために科学を駆使して、人類の活動領域の絶対量を拡大していく必要がある。人類は過去に新大陸を求めたのと同様に宇宙は、海洋に続く人類の新しい開拓地である。

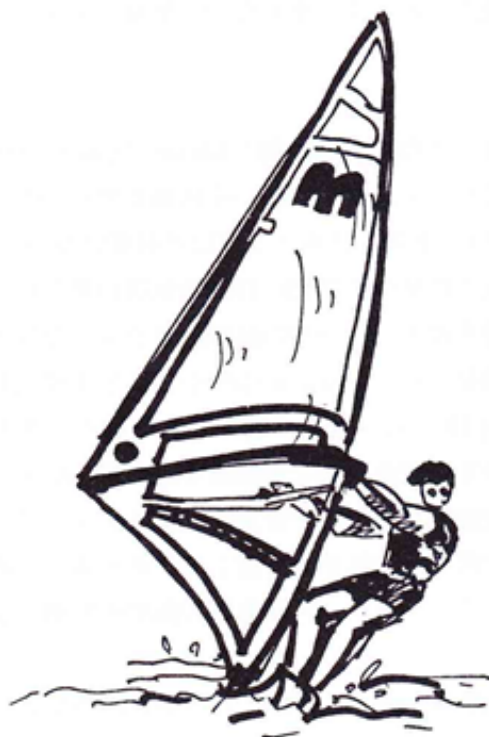
Ⅲ 巨大な構想を実現するためには、大型宇宙構造物 (Large Space Structure, LSS) のテクノロジーが不可欠である。このテクノロジーは、宇宙構造物そのものの構築とその維持・運用に関する技術とに大別され、重要な技術としてLSS制御問題が位置づけられる。

遠未来型ミッション・モデルと人工衛星の大型化に伴う柔軟構造衛星の出現、スペースシャトルによる構築実験、大型太陽電池モジュールの試作と言うような現実的なミッション・モデルについても、多く研究がなされている。そのなかで、宇宙構造物の振動を人体のアキレス腱をモデルにしたピアノ線で引っ張って収めてしまおうとする制御方式を考案、テンドン制御システムと名付けて、地上実験で有効性を確かめている。あやつり人形が上からつった糸で引っ張られたり伸ばされたりしながら支えられているのをヒントに、柔軟構造物を糸で引っ張って振動を抑える方法を考え出して、衛星本体に細長いたんざく状の柔軟構造物が取り付けられていると想定、この構造物の振動を制御しようと言うわけである。

Ⅳ 日本における宇宙開発は、H-IIロケット、ETS-VIやADEDSなどの開発によって世界的な技術水準に達しつつある。しかし、起動からの回収システム、ランデブ・ドッキング技術、ロボティクス、有人宇宙システム及び将来型の宇宙輸送システムなどは宇宙先進国からみれば、かなり遅れているか、未着手の分野である。

ロボティクス技術は日本の進んだ産業の中の一つであり、これまで地上で開発された技術を宇宙へ応用することにより、将来日本がリードできる分野であると考えられる。

V 宇宙には無限の太陽エネルギーがあり、資源は月や惑星からいくらかでも得る事ができるからこれらの利用によって人類が移住できる空間を作り出すことも可能である。言い替えば、宇宙空間は人類が活動を展開するのにきわめて適した場であると言える。地球上に生まれ進歩してきた人類は、永遠に地球に定住し、やがて他の生物に世代を譲るか、自ら創り出した環境によって亡び去るのが、自然の摂理であるとする説もある。しかし、他の生物にはできなかった科学技術の力を育て、いよいよ21世紀には大量に宇宙へ進出し月や惑星を改造した宇宙都市へと永住する方向を選択するのもまた自然の摂理に従うものといえよう。





BAHALA NA!

Cynthia Muncada

京都大学法学研究科博士課程国際法専攻

I. A day in the life of an ordinary Filipino is probably more stressful than a Tokyo "salaryman". The salaryman starts his day catching his train on crowded subways, proceeds to his cramped office in central Tokyo and spends the rest of the day harangued either by his bosses or approaching deadlines. After a couple or so decades of faithful service to the kaisha, he will probably be rewarded with a promotion which more often than not is accompanied with stress related diseases as coronary illness or high blood pressure. The ordinary Filipino wage earner on the other hand wakes up every morning to life's new uncertainties and challenges that directly relate to his basic survival. Will he keep his present job? Will his company survive the economic crunch besetting the whole Philippines economy? Will he be able to feed his family with his meager income, etc.,? But these worries are instantly vanished as he lifts his head to heaven in prayer and declares to the whole world, "Bahala na!" Thus starts his day and off he goes to work.

"Bahala na" can roughly be translated as "come what may." It is a phrase that Filipinos utter so many times in their daily lives. An unprepared student about to take a crucial school examination will summarily put his fears aside and say "bahala na." A half-done work that would surely not meet the boss' expectation will just be passed off by the employee with his "bahala na" attitude. The Filipino entertainers and illegal workers whom the Japanese are familiar with are likewise equipped with this attitude. Most of them come to Japan particularly ignorant of the situation here. But they come anyway and just say "Bahala na."

Such is the defeatist resignation that Filipinos adhere to in times of adversity. However, the very same attitude props him during very difficult times. It actually becomes a reservoir of psychic energy that sustains his will to survive despite hopeless situation in life.

The "bahala na" attitude of the Filipino is rooted in his deep faith in God. He genuinely believes that life's fortunes and misfortunes are part of the Divine will and plan. As the only Christian nation in Asia(98% of the population are Christians), religion to most Filipinos is tangible. In the form of prayer it is part of everybody's daily lives. Bound together, individual faith can be very powerful as manifested in the People Power that ousted former dictator Ferdinand Marcos in 1986. As a singular force it provides the Filipino psyche the capacity to accept failure and defeat without his ego totally crushed.

And so life goes on for our ordinary Filipino worker even if he does not see a glint of hope for a better life. He is a natural survivor in the race for the basic necessities in life. He is optimistic and incredibly stress-free. For afterall, tomorrow brings..."bahala na".

II. WOMEN IN JAPANESE SOCIETY

Japan is probably the most ideal nation in the world today. It is not only the richest, its society is so far the most egalitarian. There is no apparent gap between the rich and the poor. It is a democracy minus all the excesses of unbridled freedom. It is a socialist minus the overpresence of government. Behind this egalitarian facade however exist inequalities that unfortunately are felt only by the afflicted — women in general, and Southeast Asian women in particular.

Although Japanese women are beginning to assert a stronger role in society today, their struggle remains an uphill battle. Pursuing a career and a family life at the same time requires three times the ordinary effort put in by the average "salaryman" — double the effort to prove her worth in the workplace, and an equal one to maintain a household that is structurally patriarchal.

A basically unaccommodating society towards women, the Japanese society's attitude towards foreign women, specially Southeast Asian women (mostly Filipinas) is likewise beyond the norm expected that of an industrialized and seemingly egalitarian society as Japan. These women who have taken some of the traditional roles left by Japanese women are seen as mere objects of pleasure if they are in the entertainment business, or as servile members of the family if they had been taken in as brides to supply the demand of rural bachelors. The norm in either case appears to be "we provide you money and material comfort, you serve us." Thus bondage and servility rather than respect and love are the paramount considerations of such arrangements.

This situation is truly unfortunate for the Filipino woman used to a society where she is treated as an equal being; where she has been glorified, loved and praised in literature and history since time immemorial; where her voice counts and equal rights and opportunities are open to her. Although the self-sacrificing and loyal Filipino woman would eke it out to survive the degrading situation here, it would do so much good if she is given more opportunity to redress the human rights abuses she is faced with in the many facets of her life here.

Change however stems from consciousness, and consciousness of the situation affecting Southeast Asian women here would only be attained as the whole Japanese society itself becomes aware of the rising clamor for equality of its own women. Only then can the Japanese society be truly egalitarian. Only then can it attain genuine internationalization and deserve the epitaph of an ideal society.





(第22回KIC留学生と
世界を語る会)
トルコにおける政教分離

Kamil·A·Toplamaoglu

京都大学法学研究科国際政治専攻

お国はどちらですか?ときかれて、トルコですと答えると、決まって返ってくる言葉はこうです。あゝ!イスタンブール。そしてアラブのイメージです。アラブの国に限らず、トルコ人として、自分の国について他国のイメージを抱かれるなんて、やはり不愉快です。誤解も、特に宗教について、たくさんあります。そこでトルコにおける政治と宗教の分離についてお話しすることにします。

〔発展の歴史と範囲〕

トルコにおいて『政教分離』を私はどう理解しているかという、ふたつの視点があると思います。ひとつは狭い範囲、もうひとつはもっと広い範囲です。つまり広い意味では、政府の行政は宗教的活動から完全分離し、法律も宗教的制約から独立し、政治と宗教が完全に分離しています。しかしながら狭い意味ではどうでしょう。宗教団体に政府が援助するというかたち、あるいは、イスラム教であれキリスト教であれ、国民の宗教を守ることを政府が行っているのが本当のところでは。

では、トルコで狭い意味の政教分離はいつどのように発達したのでしょうか。オスマン帝国は史上最大のイスラムの国であり、法はコーランに基づいていました。現在の政教分離の背景は、実はオスマントルコ時代のタンジマート(改革・改制)にあるのですが、本当の意味では1923年以降、トルコが共和国になってからのことです。その時代のリーダーたちには、当然アタチュルクも含めて、「トルコ共和国は新しい国、オスマントルコとは歴史的には関係があるが、それ以外は行政的にも法律的にも経済的にも、まったく関係がない」「すべて新しく、進歩しなければならない」という考え方がありました。そして「トルコ共和国は国民の95%がトルコ民族。イスラムの教えでなく、トルコ式、トルコ人的な考え方で国をつくってゆかなければならない」「トルコ共和国に住んでいる市民は、第一にトルコ人であり、その次にイスラム教徒である」というアイデンティティーの位置づけをしたのです。

政教分離のスピードは必ずしも速くはありませんでした。歴史的にみえますと、まず1922年つまり共和国になる前の独立戦争中に開設されたトルコ国民国会がイスタンブールの王制を廃止しました。イスラム教では世界のイスラム教徒のリーダーはカリフですが、共和国となって約半年後、1924年にこのカリフ制が廃止されました。1922年に国の王でなくなったカリフもイスラム世界ではまだリーダーでした。もっともこれはオスマントルコが勝手に決めたもの、としてアラブの世界では必ずしもカリフと認められていたわけではないのですが、これが廃止されたことはたいへん重要です。

国には帝国の残したあらゆる制度が残っており、改革・廃止しなければならないことが山積していました。必ず反対意見がおこり、その解決のために多くの時間を要しました。最初にモスクや宗教学校を設立開設するための団体Vakifが廃止され、次に教育制度が変えられました。宗教的な教えを説く学校教育は一切廃止し、近代的な教育が導入されま

した。設備の改良も必要でした。内容は変わっても今なお東部地方の学校設備には課題が残されています。宗教団体を設立することも禁止されました。こうした廃止、禁止の措置で新しいトルコ共和国ができました。

しかしながら禁止されれば必ず反対派がおこります。いちばん大事なのは国民に政教分離が何であるかを説くことです。そのためにはまずイスラム教そのものが政教分離すべきでしょう。残念ながらこれは無理です。法から日常生活の在りかたまで、すべてイスラムによって決められています。歴史的な背景もあります。たとえばキリスト教のおこりはイスラム教より約600年前で政教分離もそれなりに速い時期でした。一般的に考えて、ヨーロッパはだいたいフランス革命で政教分離を確立したとすると、イスラム世界は後約400年の時間がかかることになります。

さて、トルコ共和国憲法の宗教の位置づけに変化がみられます。変化の三つの段階をみてみましょう。まず1921年の憲法では「トルコ国民の宗教はイスラム教である」の記述がありました。このときトルコはまだオスマン帝国です。共和国となって後1942年には、「トルコ国家の宗教はイスラム教」と明示されており、この記述がなくなったのは1928年でした。アメリカの大統領が聖書に手をおいて宣誓するように、トルコもイスラム教式宣誓をしてよいと思うのですが、トルコの場合は残念ながら問題がおこるでしょう。本当の広い意味での政教分離に至っていない、ということでしょうか。憲法の方では、1937年になって国家の政教分離が明確にうたわれました。

〔現状と今後の課題〕

現在、国内には大きく分けて保守派とリベラル派のふたつのグループがあります。選挙の投票率でいえば保守派が7割、そのなかでさらに1割ぐらいが、イスラム原理主義者といわれる急進的な人々です。これらの人々は数的にも少なく、強靱な力をもつ軍がイスラム国家と共産主義に非常に強い姿勢を示しているため、原理主義の拡大はありえないでしょう。

日常生活でもイスラムの教えや戒律を強制されることはまったくありません。宗教のなかには道徳的なことも含まれていますから。親から子へ、あるいは習慣として伝えられていることはたくさんあります。今は政教分離という目的がもうひとつの自由を規制している過渡期でもあるのです。日本へ来る前、女性が髪を被うベールが大学で問題になりました。スカーフを被って通学してはいけない、という政教分離派がいれば、当然その反対派も生まれます。問題はこのスカーフが政治的な意味でのシンボルとして使われているかどうか、残念ながら分離派も反対派も極端に考えすぎ、純粹に信仰を望んでいる人々にとってたいへん迷惑なことになっています。

人間の心理として禁止されれば、むしろそれだけ要求が高まります。特に子供はそうです。トルコ共和国はまだ大人になりきれていません。本来イスラム教は「禁止」の宗教ではありません。解釈の問題です。私自身も政教分離もイスラム教のなかで可能だと思っています。そのなかでトルコはアラビアの国をリードしてゆかなければなりません。イスラム教はアラビアで生まれたものですが、それを広めたのはオスマン帝国とそのまえのセルチュク帝国です。誤解を受けるいい方かもしれません、私自身がトルコ人だからかもしれません。トルコなら、いえトルコこそイスラム教のリーダー、と私は思っています。

いったいイスラム教の場合、どうして解釈がうまくいかないのでしょうか。ひとつは国の教育のレベルにあると考えます。もうひとつ、解釈する人間が宗教に興味がある人に限ら

れており、コーランの研究が科学的視点に欠けていることも見逃せません。文学的才能に長けていたモハメッドの教えから伝承されてきた解釈を多角的にとらえれば、今の時代に似合った解釈が見つかるのではないのでしょうか。そんなふうを考えています。私自身ひとりのイスラム教徒として、立派な人間になるよう努めています。その過程は断食や禁酒ではありません。さらに、今なおオスマン時代からの習慣が根強く残っていることも大きいでしょう。ものごとが危機に会ったとき人々は関心を神にむける習慣があります。もし国全体が危機におちいったら、そこには宗教が残るだけです。

こうして私は日本にいて宗教について自由に語れます。もちろんトルコでも友だち同志で自由に話せます。日本へ来て寮で知り合ったトルコの友人は敬虔なイスラム教徒です。互いに強要しないうちにあらゆることについて語り合います。自分の意見を主張しあいます。私はいつか彼が酒をのみ断食を止める日を、彼は私が酒をやめ毎日祈り、断食を始める日を、ひそかに期待しているのかもしれない。期待だけでも私は満足です。かけがえない友人、彼とはトルコで出会ってもきっと親しく、仲よくなれますが、たぶん環境のちがいで出会っていなかったかもしれない。

私と彼、ここでつくったふたりの世界を、トルコでつくらなければなりません。5300万人のあいだでつくらなければなりません。帰国したら身近な人から、もっとやわらかいかたちで話し始めるつもりです。





中高年者の健康と運動

金 炫 秀

大阪市立大学生活科学研究科博士課程

若い人もいつかは年をとって生理機能がだんだんおとろえてくるし、また病気にかかりやすくなり、病気で死ぬ率が高くなる。最近、医学が進歩し、医療が普及して寿命が急速に伸びていく。しかし、今日高血圧症、糖尿病、高脂血症などの循環系の成人病の有病率は急激に増加しており、これらが虚血性心疾患を誘発していることはよく知られている事実である。したがって、これらの疾患の対策としては、まず心臓・血管系の鍛錬を行うことが必要で、これをもっとも簡便で容易に行えることが“運動”ということになる。健康は個人にとって幸福の証であり、宝であると同時に、家族にとっても大きな財産のひとつである。われわれが求める健康は医者や看護による健康ではなく、老化を防止し、退行性の慢性病に対する抵抗力と、ストレスや精神系統の平衡からくる健康を求めて、終生心身ともに活動的でありたいという願いである。いわば病院の待合室での半病人生活から脱出した「脱病院化社会」の健康自衛策として、体力維持・増進のための運動健康法を実践する人々が増加の傾向にある。

運動は年齢にかかわらず大切であるが、中高年者にとって運動はとくに重要である。中高年者が健康と体力を維持するために運動の実施は必要欠くべからざる条件である。そのためには、いろいろな意味で、からだを動かすこと、運動が良いといわれているが、どのように運動をすればよいのか、どのような注意が必要なのか、といった点になると、十分わからない。

1. 中高年者の運動の目的

中高年者にとって身体活動の目的は、第1には、日常生活を営む上で欠くことのできない労働である。この必要条件としての身体活動が満足されれば、次の目的とされるのは、健康の保持・増進と加齢にともなう退行性変化や運動不足が一因として生ずる成人病の予防およびリハビリテーションにある。このように健康体力を目指した運動（スポーツ）は、

(1) 成人病とくに動脈硬化性疾患と糖尿病の予防、(2) 心肺機能の向上、(3) 筋機能の向上、(4) 柔軟性の向上、(5) 精神的ストレスの解消、などが目標になる。そして、これらの目標は若年者も同様である。そして、さらにはレクリエーション（楽しみ）として運動することが目的となる。また肉体的効果よりも精神的効果が重要である。現在、私は虚血性心疾患や高血圧者に病院関係者の協力を得て運動処方をした結果、運動能力・呼吸循環機能の増進だけではなく健康への自信を持ち、生きがい感や生活意欲も高くなったことがわかった。そこで心身を鍛えるという発想ではなく、仲間と一緒にスポーツをたのしむという発想で考える方がよい。

すなわち、中高年者の運動の目的は生理的活動能力を可能な限り維持することに主眼をおくべきである。そして自主的に運動を行うことによって運動を習慣化し生活化させることが目的である。

2. 中高年者の運動能力の特性

中高年者は、(1) 体力・生理的予備力が低い、(2) 個人差が大きい、(3) 組織の老化がある、(4) 回復力が低下しているなどの弱点がある。しかし、若年者ののできるスポーツはすべて中高年者にもできる。たとえばむかしはとても無理と思われていたマラソンレースが中高年者でも女子でもできることは一般的な話になっている。70歳代で日常的によく運動している人と、運動していない人の基礎代謝量を比較したところ、よく運動している人の値の方が平均56.4%高いことが報告されている。しかし、中高年者になって運動量を減少させなければならなくなる原因は主として疲労回復が遅れるようになるためである。その他も筋力、特に心筋機能の低下、運動状態への適応がおそい、心拍数の上昇と比較して血圧の上昇が著しい、等が若年者とことなる。

一般に中高年者は暑さ寒さに弱く、そのうえ血圧の高い人や心臓に問題のある人が多いので、なるべく冷暖房が完備されたスポーツ施設で運動をしてほしい。

3. 中高年者の運動の選択と方法

運動は低い強度で長い時間を行うエアロビック（有酸素的）運動がよい。本来エアロビック（aerobic）とは「体内での酸素の需要と供給のバランスが十分に保たれる状態」を意味するものなので、この定義に該当するスポーツまたは身体活動の種類は数多いといえよう。

最も代表的なエアロビクスは、人の基本動作の歩行である。

一方、65歳以上の高齢者人口の約1/3は骨粗症に悩まされているという。散歩の習慣は、下肢筋力を強化し、歩行能力を上昇させて、間接的に骨粗症の程度を少なくする報告もある。毎日ゲートボールをしている人にも骨塩量が30歳代のそれと変わらないという報告もある。このように軽い運動でも骨のカルシウム量を増加させる。

レクリエーション的な運動、すなわち1) 自由時間におこわれる、2) 自発的な活動で3) 喜びを伴い、4) 生活を豊かにする運動から始めて段々運動に慣れて、体力が付くと次の点に注意しながら運動量を増やしていくのが望ましい。

- (1) 血圧が急激に上昇する強い筋力トレーニングあるいは動きの不規則な運動（球技、格闘技）よりは余裕をもって行えるし、マイペースを守れるswimming, jogging, runningの方がよい。
- (2) 運動の強度の目安としては1) 不自然であるが会話ができる、2) 気持ち良く走れる、3) 発汗を自覚する、4) ややきつい等である。

運動処方上の留意点としては、1) Medical check、2) 運動負荷試験、3) 運動種目・強度、4) 事前の体調のチェック等が上げられる。

また、高齢者はからだに運動に適応するのに時間がかかるので、ウォーミングアップを十分に行い、できれば、スポーツを実行する前に血圧と脈拍をチェックして置くとよい。

スポーツ活動には疲労が伴う。疲労の回復のためには休養が必要である。休養には、消極的休養と積極的休養とがあるが、マッサージ、入浴、栄養、睡眠などはいずれも前者の休養法に含まれる。これに対して、スポーツ活動後のクーリング・ダウンは、後者の積極的休養法といえる。クーリング・ダウンは「スポーツにおける全身運動の後に、めまいや卒倒を防ぎ、回復を促進するために軽い全身運動、すなわち回復運動」である。



米山奨学生学友会OBとの INTERVIEWおよび紹介

米山奨学生学友会（関西）

第264地区担当副会長 黄 承 國

今回から米山奨学生学友会（関西）の親睦活動の一つとして米山奨学生のOBを紹介する紙面を企画してみました。皆様の考えを聞くことによって、より豊かな時代の考え方に接することができ、より楽しくロータリー精神を実践することができると思います。INTERVIEWに応じてくれましたOBの方々に感謝の意を表します。また、いまから米山奨学生のOBの方々にINTERVIEWの件などで世話になると思いますので、宜しくお願い致します。会員様の御意見もお待ちしておりますので、宜しくお願い致します。

「日本に住んでいるOB」

1) 林 錫章（リン シャク ショウ）

- ① 現在の所属：桃山学院大学教授（民事法担当）
- ② 奨学生の時の所属：名古屋大学大学院博士課程
- ③ 奨学生の時の世話クラブ：名古屋西RC
- ④ 奨学受給期間：1968～1970（2万5千円）
1970～1971（3万円）
- ⑤ 奨学生時代に感じたこと：民間組織でこんなに大規模な奨学金を発給している所は無く、また奨学生の健康・生活など非常に気遣って下さり、安心して勉学できたことはとても良かったと思った。
- ⑥ 米山奨学会への提言及び希望事項：奨学生の選抜について、指導教授の推薦を偏重しすぎはしないかと思ったことがある。もしそうであれば、指導教授の推薦の手の入れようによって個人差が生じ、客観的判断ができなくなる。もっと具体的にその人物、学業、活動などの面から客観的、公平的に選抜する方法はないか。
- ⑦ 米山学友会への提言及び希望事項：とくにないが、役員の方々の英知と能力を全面的信頼しているので、頑張ってください。
- ⑧ 自分が考えるロータリー精神というのは：感謝されることを期待しないで、優しい気持ちをもって、人に役立つことをすることである。
- ⑨ 自分がやっている奉仕は：とくにないが、敢えていえば、日本人学生を教育し、法律相談や人生相談の相手にしてあげる事が奉仕に当たるといえようか。
- ⑩ 連絡したい方々のために：（自宅）〒558 大阪府堺市鳳中町8-284-7
☎ (0722) 62-4633
- ⑪ その他：米山奨学生学友会（関西）前第264地区担当副会長



2) 大塚賢龍 (オオツカ ケンリュウ)

- ① 現在の所属：甲子園大学経営情報学部講師
(マーケティング、広告)
- ② 奨学生時代の所属：大阪府立大学経済研究科博士課程
- ③ 奨学生時代の世話クラブ：堺東RC
- ④ 奨学受給期間：1978～1981 (8万)
- ⑤ 奨学生時代に感じたこと：カウンセラー (堺東RC副会長の小林康人先生) との家族付き合いで精神的に助けて頂いて有難い。
- ⑥ 米山奨学会への提言及び希望事項：米山奨学生と国の数を増やしていろいろな国の人と交流することが国際親善の望ましいことではないでしょうか。
- ⑦ 米山学友会への提言及び希望事項：米山学友会 (関西) 4地区の活発な交流が欲しい。米山奨学会の紹介および案内によって米山学友会をPRして欲しい。
- ⑧ 自分が考えるロータリー精神というのは：庶民的な精神にしていきたい。
- ⑨ 自分がやっている奉仕は：教育を通じて専門的なことを社会への奉仕
- ⑩ 連絡したい方々のために：(自宅) 〒532 大阪市淀川区三津屋北1-6-20
☎ (06) 301-3358
- ⑪ その他：米山学友会 (関西) 第268地区担当副会長



「日本外に住んでいるOB」-韓国

1) 林 隆義

- ① 現在の所属：延世大医大内科外来教授
大韓医学協会総務理事恵聖病院長
- ② 奨学生時代の所属：京都大学胸部疾患研究所
臨床肺生理学専攻
- ③ 奨学生時代の世話クラブ：京都西南RC
- ④ 奨学受給期間：1977.4～1978.3
- ⑤ 奨学生時代に感じたこと：カウンセラーとの家族ぐるみでの付き合いによって精神的に助かったこと
- ⑥ 米山奨学会への提言及び希望事項：ロータリーと付き合いがない人に幅広く経験させて下さいますように願います。
- ⑦ 米山学友会への提言及び希望事項：お互いに頑張る国際社会への奉仕を考えてみましょう。
- ⑧ 自分が考えるロータリー精神というのは：愛を行動で
- ⑨ 自分がやっている奉仕は：職業を通じての奉仕 (医療奉仕で国民勲章授与)
ロータリーアンとしての奉仕は、韓国と日本とのロータリークラブとの姉妹関係を結ぶことに力を入れている。(漢城RC-京都西南RC、麻浦RC-京都桂川RC)
- ⑩ 連絡したい方々のために：(病院) 韓国SEOUL市麻浦区東橋洞172-13
☎ (02) 334-4642
- ⑪ その他：漢城RC前会長、麻浦RC創立 (1988年11月11日)、麻浦RC会長
韓国ロータリー米山記念奨学会学友会の会長



2) 安 熙道

- ① 現在の所属：韓国科学技術研究所海洋研究所
海洋工学研究室前任研究員、
漢陽大学校環境科学大学院講師
- ② 奨学生時代の所属：東京大学工学研究科
土木工学科修士課程
- ③ 奨学生時代の世話クラブ：東京江北RC
- ④ 奨学受給期間：1977.4-1979.3
- ⑤ 奨学生時代に感じたこと：感謝の気持ち
- ⑥ 米山奨学会への提言及び希望事項：大勢の人々がロータリーとの交流ができるように
- ⑦ 米山学友会への提言及び希望事項：お互いに頑張りましょう
- ⑧ 自分が考えるロータリー精神というのは：社会への奉仕
- ⑨ 自分がやっている奉仕は：韓国ロータリー米山記念奨学学友会を通じたロータリー精神の実践
- ⑩ 連絡したい方々のために：（研究所）韓国京畿道安山市四洞385BLOCK
☎(研究所) (02) 863-4770
(自宅) (02) 542-8180
- ⑪ その他：韓国ロータリー米山記念奨学学友会の総務



韓国ロータリー米山記念奨学学友会について

韓国ロータリー米山記念奨学学友会というのは、韓国人として日本の米山記念奨学会の奨学金を受給された方々の集まりである。

設立日：1989年6月17日

目的：会員相互間の親睦を図謀し、各種交流を通じて韓日間の友好を増進し、ロータリー精神を具現することである。

- 事業：1. 親睦と相扶相助
2. 韓日間の友好増進及び学術、人的交流
3. 奨学事業
4. 奉仕事業
5. 会誌発刊
6. 本会と目的を共にする国内外団体との交流

連絡したい方々のために：韓国SEOUL市麻浦区東橋洞172-13

☎ (02) 334-4642

*日本米山記念奨学会委員歓迎会

ホスト：韓国ロータリー米山記念奨学学友会

日時：1989年5月22日（月）

場所：朝鮮ホテルGRAND BALL ROOM





韓国ロータリー米山記念奨学学友会の 設立に力になった前R.I.理事を訪ねて

前R. I. 理事

竹圃 吳 在景

米山学友会のOBとのINTERVIEWのために韓国のSEOULに行ったとき、韓国米山学友会の設立の際に多大な力になって下さいました前R. I. 理事の 竹圃 吳 在景先生と少しの時間を同じく過ごすことができました。竹圃先生も昔日本に留学した経験がありまして、いま日本に留学している私に有益なるいろいろな話を聞かせて下さいました。先生は韓国の長官を歴任したこともあると側近の人から聞きました。先生の話聞きながら私自信を考えてみました。私は、竹圃先生のように、人との出会いの際にもものすごく短い時間でも余裕を持って相手に暖かく気楽にしてあげることができればいいなと思いました。先生は未熟な私を相手にして下さいした上に、先生の七十而自術の本も下さいました。その本を読んでみて先生の人生の哲学を少しは分かった気がしました。その中で一番気に入った一つの文句を皆様に紹介させていただきます。

竹圃先生、先生の人生の哲学をできるだけ数多くわれわれ若者に聞かせて下さいますように願いながら先生のご健康をお祈り致します。(米山奨学生学友会(関西)第264地区担当副会長 黄 承國)



先生の雅号

最高は
무척 더라도
최선을
다하는
생활을

最高には
至らずとも
最善を尽す
生活を

米山奨学生学友会（関西） 総会報告

米山奨学生学友会（関西）幹事

石 若 一

大阪市立大学商学研究科博士課程

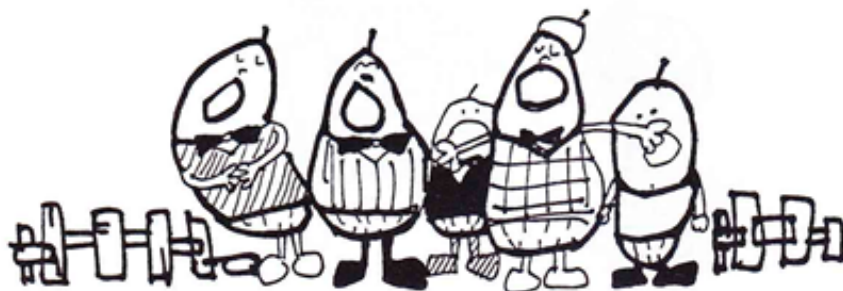
1990年度米山学友会（関西）総会ならびに新入生歓迎パーティーは、去る5月20日（日）午前11時よりホテル南海において、米山記念奨学会監事（P.G）伊瀬芳吉、同常任理事（P.G）種田憲次、（P.G）戸田孝、同第266地区米山奨学委員長永野啓之介、第264地区米山奨学会委員長井口廣昭、第266地区ガバナー武尾敬之助、ガバナーノミニー広瀬勘一郎、ガバナーエレクト（次次回ガバナー）菅生浩三、または多数のカウンセラー、学友会会員（元および現奨学生）ならびにその家族の参加を募ってにぎやかに開催されました。

まず、第一部の総会では学友会会長の挨拶、事業報告、会計監査について報告がなされ、引き続いて議事に入り、次回の会長ならびに幹事長の選出、副会長および幹事の承認、次年度の活動方針と新年度の予算の発表、さらに米山記念奨学会関係者の皆様よりのご挨拶や力強いご支援の言葉を賜り、総会の所事行事が円滑に行われました。

第2部のパーティーでは戸田孝（P.G）の乾杯の音頭により始まり、武尾敬之助ガバナーを初め、多くのロータリアンよりお祝いの言葉をいただきました。カラオケ大会では、学友の皆さんは、われさきにカラオケの歌を披露し、とくに前学友会会長重光世洋先生の「わが人生に悔いなし」は皆の好評を得て、一等賞が与えられました。そして、会場のあちらこちらで、ロータリアンと米山奨学生、奨学生と奨学生、新入の方と元の奨学生の交流と話し合いが見られ、最後に参加者一同は輪になって「奉仕の理想」と「手に手つないで」をともに高らかに歌い、また会う日を約束して散会しました。

年一回の総会は、多くの米山関係者、ロータリアンのご支持の下に、すでに米山奨学生学友会の一大行事になっており、この場で、地区とクラブの区域を超え、ロータリアンと米山奨学生学友会会員、奨学生同志の間の交流が幅広く行われ、親善、理解、協力への道とつながります。

最後に、奨学生のお世話をいただいているクラブの皆様、米山奨学会、学友会の関係者の皆様のあたたかいご声援に心から御礼を申し上げ、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。





なぜ、私は教育学を選択したか

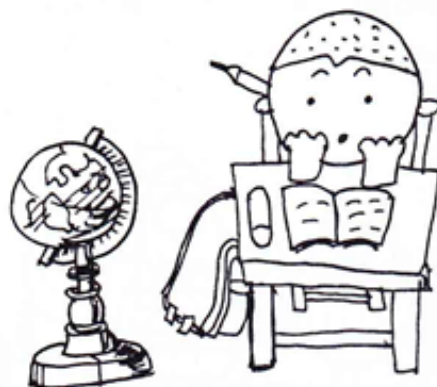
蔡 昭 慧

大阪女子大学教育学専攻3回生

私が学校で専攻しているのは「教育学」です。しかし私は台湾で、もともと経済学部を出たので、教育についての知識はあまり持っていません。ただ教育というのは、人間にとって、生れてから関わっているものと言えるのではないのでしょうか。例えば、幼児の頃から関わっている家庭教育、そして幼稚園の入学・小学校・中学校・高等学校……。それらは、すべて教育の範囲の中に含まれていますから、私もその過程の流れの中で、成長して来ましたから、教育に対する興味、特に児童教育に関しては、だんだん興味深くなってきました。その上、現代の社会では「子供中心主義」の風潮になっています。それに現代のマスコミやメディアは子供に影響を与えます。なぜならば、子供は大人より、善と悪の区別はあまり分かりません。ですから、もっと教育に力を入れなければならないと思います。

教育には、さまざまな分野があり、またその中にさまざまな問題があり、勉強すればする程、その奥深さを感じます。例えば、道徳の研究と臨教審（臨時教育審議会の略称）というテーマをゼミで発表しましたが、このような大変固いテーマを発表することは、絶対無理だと思いましたが、実際発表してみると案外固いテーマの背後に豊かな内容とか由来とかを潜んでいることが分かりました。

そこで、学問というのは、ただおもてを見ることじゃなくて、その中に含まれているおもしろさを掘り出すことが大事なことだと思います。というわけで、私は自分が教育に関して、興味を持っていることを生じて、どんどん勉強していきたいと思っています。



米山奨学生学友会（関西）の1990年度活動報告

1. 主な行事

- 行事 米山奨学生学友会（関西）
1990年度総会
- ホスト 米山奨学生学友会（関西）
- 日時 1990年5月20日（日）
- 場所 ホテル南海
- 参加人員 100名
- 内容紹介 挨拶、役員を選出及び承認、
新入生歓迎会
- 行事 米山奨学生歓送会
- ホスト R. I. 第266地区
- 日時 1990年3月11日（日）
- 場所 新阪急ホテル2F紫の間
- 参加人員 学友会から代表として4名
- 内容紹介 挨拶、終了奨学生の紹介、修
了証書、記念品贈呈、会食。
- ホスト R. I. 第264地区
- 日時 1990年3月26日
- 場所 AMINITY SAKAI
- 参加人員 学友会から代表として4名
- 内容紹介 挨拶、終了奨学生の紹介およ
び感想発表 修了証書・記念
品贈呈、会食
- 行事 新米山奨学生オリエンテーシ
ョン
- ホスト R. I. 第264地区
- 日時 1990年5月18日（金）
- 場所 泉陽信用金庫の4階講堂
- 参加人員 学友会から代表として4名
- 内容紹介 挨拶、オリエンテーション、
米山奨学生学友会（関西）の
紹介

2. 新しい役員および各大学代表の集いにより、5月20日の1990年度の総会について協議をもった。また、米山奨学生学友会（関西）の会報の編集委員会も開き、第6号の構成についての協議をもった。

10月10日の役員会では、今後の活動及び日程、秋の懇親会の企画などについて協議をもった。また、編集委員会では、予定の期限内に原稿が集まってくれないなどのことによっておくれた第6号と第7号とを一緒に出版することをきめた。10月20日の編集委員会では、会報の印刷所に寄り会報第7号統合の実際的な構成を行った。

3. 米山奨学生学友会（関西）の会報についての内容紹介

第6, 7号

・米山奨学生学友会（関西）が成熟していく意味にあわせて新らしく表紙を作った。

・国際交流及び国際親善、また自分の専攻についての自由テーマ

米山奨学生学友会（関西）

親睦幹事 金美貞

NEWS

○ 「こんにちは！アジアからの留学生です」

堺ロータリークラブは、地域における国際理解を図るための活動の一環として下記によりフォーラムを企画し本学友会会員の5人が参加しました。

アジアから堺に留学している学生とロータリアンが一堂に会して交流と理解を深めることを目的とし構成や内容を我々留学生が考え、企画することにより本音で語り合える会合となりました。

記

1. 日 時 1990年4月14日(土) 14:00~17:00
2. 場 所 堺YMCA会館ホール
3. テーマ ① 留学生から見た日本の社会
② 留学生のきびしい現実
③ 何故日本留学なのか
④ 留学生の望むもの、望むこと
⑤ 堺の町、堺の人について
4. 主 催 堺ロータリークラブ
5. 参加者 莊 淑娟 (大阪教育大学:台湾)
劉 璟東 (大阪府立大学:中国)
ASEP, MUJIZAT(大阪府立大学:インドネシア)
SHURESTER, MANABABA(大阪府立大学:ネパール)
千 文奉 (大阪府立大学:韓国)
黄 承国 (大阪府立大学:韓国)

○ 第8号の原稿をお待ちしています。

学友会会報を全会員及び関係者の皆様の対話の広場にしたいと考えています。つきましては次の要領でご投稿願います。

テーマ: 私の国、故郷の自慢や文化など
: 国際交流および国際親善に役立つこと
: 私の家族や専攻話、紀行文など、なんでも結構です。

お送り先: 〒565

吹田市佐竹台1-2 大阪府留学生会館 C107

千 文奉

米山奨学生学友会（関西）会則

制定 1986年5月1日

施行 1986年5月11日

改定 1989年5月27日

〔名称〕

第1条 本会は、米山奨学生学友会（関西）という。

- 2 本会は、本部を国際ロータリー第266地区ガバナー事務所内に置く。主な連絡先は会長及び幹事長宅とする。

〔目的〕

第2条 本会は、元及び現米山奨学生間の交流を通じて親睦及び互助を促進すると共に、国際親善及び世界の平和に寄与することを目的とする。

- 2 本会は、財団法人ロータリー米山記念奨学会の事業の発展に寄与することを目的とする。

〔構成員〕

第3条 本会は、正会員、準会員及び名誉会員をもって構成する。

〔会員の資格〕

第4条 本会の会員資格は、次のものとする。

- (1) 正会員は、元米山奨学生とする。
- (2) 準会員は、現米山奨学生とする。
- (3) 名誉会員は、本会の目的に賛同し、会の発展及び活動に援助・協力するロータリアン並びに会員の指導教授とする。

〔会員の権利〕

第5条 会員は、総会に出席して議事を審議並びに表決し、また本会の主催する諸般の活動に参加することができる。

〔会員の義務〕

第6条 会員は、会則の順守及び本会則第2条及び第15条の実施に当たっての協力並びに本会の規定した年会費を納入するものとする。

〔機関〕

第7条 本会は、次に掲げる総会及び役員会を置く。

- (1) 総会は、全会員で構成した本会の最高議決機関で、毎年一回定期総会を開催する。ただし、会員の3分の1以上または役員会の請求があるときは、臨時総会を開催しなければならない。
- (2) 役員会は、総会に準じる議決機関で、全役員で構成し、毎年4回定例役員会を開催することを原則とする。ただし、会長または全役員の3分の1以上の請求があるときは臨時役員会を開催しなければならない。役員会に出席できない役員は、事前に会長または幹事長の了解を得て委任状または代理人をもって代行することができる。

〔審議事項〕

第8条 総会は、次の事項を審議し、承認する。

- (1) 本会の事業計画及び予算に関する事項
- (2) 会長及び幹事長の選出並びに役員承認に関する事項
- (3) 第2条及び第15条に係わる会員並びに役員提案に関する事項
- (4) その他、本会の運営上、重要な事項

〔役員会の任務〕

第9条 役員会は、次に掲げる事項を実行及び解決に務めるものとする。

- (1) 総会の決議事項
- (2) 第2条の目的及び第15条の活動に係わる計画・立案及び実行
- (3) 会員に難問が生じた場合の解決
- (4) その他、本会の目的達成に係わる事項

〔定足数〕

第10条 総会は、全会員の過半数（委任状を含む）の出席をもって成立する。

- 2 役員会は、全役員数の3分の2以上（委任状を含む）の出席をもって成立する。

〔表 決〕

第11条 総会における表決は、出席者の過半数の賛成をもって決する。重要議事は、出席者の4分の3の賛成をもって決する。重要議事には、会の解散、会則の改訂及び役員解任等が含まれる。ただし、可否同数のときは、議長の決するところによる。

- 2 役員会における表決は、出席者の3分の2以上の賛成をもって決する。ただし、可否同数のときは、議長の決するところによる。

〔役 員〕

第12条 本会は、次の役員を置く。

会長 1名

副会長 4名

幹事長 1名

幹事 若干名（親睦、国際交流、学術、庶務、書記、会計）

- 2 会長及び幹事長は、公正な運営を図るため、それぞれ異なる国籍を有する者とする。会長、副会長及び幹事長は、正会員の中から選出するものとする。

〔役員を選出〕

第13条 会長及び幹事長の選出は、それぞれ総会に出席した全会員の無記名投票により行ない、過半数の得票をもって当選とする。ただし、得票が過半数に達しないときは、上位2位で決選投票を行ない、最多得票をもって当選とする。その他役員は、会長及び幹事長の推薦で総会の承認を受け選出する。

- 2 会長ノミニ一及び幹事長ノミニ一は会長及び幹事長の人気満了1年前の総会において前項の選出方法により選出するものとする。

〔役員任期〕

第14条 役員任期は、2年とするが再任を妨げない。ただし、会長及び幹事長の任期は最長4年とする。

〔役員会の活動〕

第15条 役員会は、第2条の目的を達成するため、必要に応じ、次に掲げる企画及び活動を行なう。

- (1) 親睦会及び座談会の開催
- (2) 新入会員の歓迎会の開催
- (3) 日本での修学を終え母国に帰国する会員の歓送会の開催
- (4) 日本における国際親善のための各種行事への参加
- (5) 他地区米山奨学生学友会との交流・連絡
- (6) 財団法人ロータリー米山記念奨学会との連絡
- (7) その他、本会の目的に沿う諸活動

ただし、政治に係わる一切の活動は禁じるものとする。

〔役員職務〕

第16条 役員職務は、以下のものとする。

会長：本会を代表し、会務を総括する。総会及び役員会の議長となる。総会及び役員会において採択された議案を遂行する。とくに、第2条及び第15条の目的を達成するため、幹事長と共に会員及び役員をリードする。

幹事長：総会並びに役員会その他の企画及び諸活動の実務及び雑務を総括する。会長と共に会員及び役員をリードする。

その他役員：会の細則をもって定める。

〔役員欠員の処置〕

第17条 会長に欠員が生じた場合、役員会の承認を得た副会長が代行する。任期は前会長の残任期間とする。

- 2 幹事長に欠員が生じた場合は、役員会の承認を得た副会長が兼任する。
- 3 その他の役員及び幹事に欠員が生じた場合は、会長及び幹事長の推薦で役員会の承認を受け選出する。

〔会費〕

第18条 会費は、正会員会費とする。

- 2 正会員会費は、年額とし、毎年（4月～5月）2000円の年会費を納入するものとする。
- 3 準会員は、年会費を免除する。
- 4 会費の改訂は、総会の議を経るものとする。

〔経理〕

第19条 本会の経費は、会費、補助費及び他の収入で賄う。

- 2 会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日迄とする。
- 3 予算の執行については、会計監査人の監査を年2回受けなければならない。

〔会計監査人の選出・任期及び任務〕

第20条 会計監査人は、会長及び幹事長の推薦で、総会の承認を受け選出する。

- 2 会計監査人の任期は2年とするが、再任を妨げない。
- 3 会計監査人に欠員が生じた場合は、会長及び幹事長の推薦で、役員会の承認を受け選出する。ただし、任期は前任者の残任期間とする。
- 4 会計監査人の任務は、会の細則をもって定める。

〔相談役の委嘱及び任務〕

第21条 本会は、相談役を若干名置く。

- 2 相談役は、ロータリアンの中から役員会の決定で委嘱する。
- 3 財団法人米山奨学会の現理事及び監事、現地区ガバナー及び現地区米山奨学委員長は、相談役の対象となる。
- 4 本会の歴代会長及び幹事長も相談役の対象となる。
- 5 相談役の任期は、委嘱した年度から3年とする。ただし、再任を妨げない。
- 6 相談役の任務は、会の細則をもって定める。

〔補 則〕

第22条 本会則に定めない事項については、総会または役員会の議を経て別に定めることができる。

- 2 本会則の改正・補充削除は、役員会及び総会の決議をもって定める。
- 3 本会則の施行に当たっての運営方針及び細則は、役員会の議を経て別に定めることができる。

米山奨学生学友会（関西）細則

制定 1986年5月1日

施行 1986年5月25日

〔名称〕

第1条 本細則は、米山奨学生学友会（関西）細則（以下「細則」と称する）という。

〔内容〕

第2条 本細則は、会則に規定されていない役員、会計監査人および相談役の任務を規定するものである。

〔役員の仕事〕

第3条 役員の仕事は、以下のものとする。

副会長：会長の仕事を補佐する。会長が不在のとき、会長の要請を受け、会長の仕事を代行する。担当地区の会員の状況を把握する。

国際交流担当幹事：国際交流・理解および友好を深めるため、各種行事を企画する。会員相互、とくに正会員と準会員との親睦を促進するため、通信連絡をし、交流の機会を企画する。

学術担当幹事：会員の学術研究の向上を促進するため、論文集または各種研究情報を編纂し、会員に提供する。

親睦活動担当幹事：会員相互およびロータリアンとの親睦を深めるため、日本のおよび文化的行事に参加する機会を企画する。

庶務担当幹事：総会および幹事会、または会の活動に必要な物品の購入を担当する。

書記担当幹事：総会および役員会における議事および決議事項を記録し、幹事長に報告する。役員会および役員として執行した全事項を記録し、保存する。

会計担当幹事：この会の会計全般を管理し、記録する。支出に係わる一切は幹事長の許可を得なければならない。

〔会計監査人の仕事〕

第4条 会計監査人は、この会の会計全般を監査する。その結果を総会に報告する。

〔相談役の仕事〕

第5条 相談役は、会則第2条および第15条に示す本会の目的および活動の健全な発展並びに向上に資するため、会員または役員を指導する。

2 会の運営上または会員に問題が生じた場合の諸事項に対し、相談を受け、指導する。

〔補則〕

第6条 本細則に定めない事項については、役員会の議を経て別に定めることができる。

2 本細則の改正・補充削除は、役員会の決議をもって定めることができる。

米山奨学生学友会会則「各大学代表」についての細則

〔各大学代表の選出〕

第1条 会長及び幹事長の推薦により、各大学より1名を選出する。各大学代表に欠員が生じたときも同様とする。

〔任 期〕

第2条 4月1日より翌年3月31日までの一年間とする。
但し、再任は妨げない。

〔任 務〕

第3条 役員会に参加し、また役員会の決議事項を当該大学会員に伝達し、その遂行を勧告する。

会員が会に対して要望事項がある場合は、これを役員会において提案する。

各大学代表、会員相互の親睦を促進するため、特に以下の事項を遂行する。

- 1 会員に学生生活上の障害が生じた場合には会長及び幹事長に相談する。
- 2 会の諸活動について当該大学会員に伝達し、その活動の便宜をはかる。

1989～1990年度 米山奨学生学友会 (関西)

会計収支決算報告書

自 1989年5月20日

至 1990年5月19日

会 長 重光 世洋

〈収入の部〉

	科 目	金額 (円)
1.	1988年度繰越金	267,528
2.	1989年度総会費	321,000
3.	1989年度会費	50,000
4.	1989年度総会援助金 (奨学会)	70,000
5.	1989年度交流会費	46,000
6.	1989年度交流会援助金 (奨学会)	70,000
7.	米山記念奨学会援助金	200,000
8.	地区援助金	400,000
9.	寄付金	16,000
10.	合計	1,440,528

〈支出の部〉

	科 目	金額 (円)
1.	1989年度総会費用	350,000
2.	1989年度総会印刷, 写真代	6,430
3.	1989年度総会返金	8,412
4.	1989年度交流会費	195,558
5.	会議費	31,353
6.	会報第4号印刷補助金	250,618
7.	会報第4号郵送代	34,395
8.	会報第5号印刷補助金	150,618
9.	会報第5号郵送代	5,766
10.	1990年度総会案内	13,060
11.	1990年度総会案内	35,301
12.	1990年度総会案内	9,845
13.	慶弔費	20,462
14.	見舞費	5,150
15.	通信連絡費	60,021
16.	雑費	5,332
17.	次年度繰越金	258,207
18.	合計	1,440,528

会計監査 豊田秋雄

米山奨学生学友会（関西）役員名簿

1990.12

会 長	魏 栢良[大阪市立大学法学研究科] 〒567 大阪府茨木市新郡山1-12-302	[大阪平野R.C] Tel. 0726-43-6158
幹事長	文 燕友[帝塚山短期大学] 〒658 神戸市東灘区向洋町中5丁5-533-914	[大阪平野R.C] Tel. 078-857-2679
副会長		
(D-264)	黄 承国[大阪府立大学工学研究科] 〒591 堺市百舌鳥赤畑町3-191	[堺R.C] Tel. 0722-58-5420
(D-265)	Sharma Ajay Kumar[龍谷大学経済学研究科] 〒612 京都市伏見区深草綿森町アサクラハイツ305	京都紫野[R.C] Tel. 075-642-0014
(D-266)	Dileep Chandralal[神戸大学文化学研究科] 〒560 豊中市本町1-5-17	[堺西R.C] Tel. 06-854-7434
(D-268)	大塚 賢龍[甲子園大学経済学部] 〒532 大阪市淀川区三津屋北1-6-20	[堺東R.C] Tel. 06-301-3358 06-308-4070
幹事		
(庶務)	石 若一[大阪市立大学商学研究科] 〒590-01 堺市三原台1-3-42-105	[大阪住吉R.C] Tel. 0722-97-0601
(親睦)	金 美貞[京都市立芸術大学美術研究科] 〒540 大阪市中央区神崎町2-15 シンボニーアネックス602号	[阪南R.C] Tel. 06-765-6172
(学術)	千 文奉[大阪府立大学経済学研究科] 〒565 吹田市佐竹台1-2 大阪府留学生会館 C107	[堺泉北R.C] Tel. 06-835-5609
(国際交流)	Shrestha Manababa[大阪府立大学経済学研究科] 〒542 大阪市南区島之内1-3-25御津大教会	[堺南R.C] Tel. 06-244-0515
(会計)	林 珠雪[神戸大学文学研究科] 〒650 神戸市中央区港島中町3-1-55-705	[大東R.C] Tel. 078-302-5848
(書記)	范姜 真徹[京都大学法学研究科] 〒530 大阪市北区天神橋4-7-31 アスカマンション502号	[京都山科R.C] Tel. 06-358-9436
会計監査	豊田 秋雄[豊田歯科病院]	[大阪西南R.C] Tel. 06-308-5177
顧問	重光 世洋[大阪産業大学工学部] 〒630 奈良市七条西1-11-19	[大阪R.C] Tel. 0742-44-5004

米山奨学生学友会（関西）各大学の代表

1990.12

《D-264》

- | | | |
|-------------------|--|----------------------------------|
| 大阪府立大学
(工学研究科) | 鄭 錫賛
〒593 堺市宮山台4-3-16-209 | [和歌山東R.C]
Tel. 0722-96-6734 |
| 大阪女子大学
(文学部) | 區 瑞霞
〒593 堺市大野芝向ヶ丘町1-901-16 | [堺おおいずみR.C]
Tel. 0722-77-9481 |
| 大阪芸術大学
(工芸学科) | 王 幸珍
〒661 尼崎市東園田町9-1-14 園田グリーンパーク608号 | [堺R.C]
Tel. 06-498-6449 |

《D-265》

- | | | |
|---------------------|---|--------------------------------|
| 京都大学
(経済学研究科) | 張 韓模(韓国)
〒614 京都府八幡市男山弓岡2番地 B27-201 | [海南R.C]
Tel. 075-981-0082 |
| (農学研究科) | 楊 朝平(台湾)
〒606 京都市伏見区向島鷹場町104-1
向島学生センター2棟301室 | [泉佐野南R.C]
Tel. 075-712-9411 |
| 京都市立芸術大学
(美術研究科) | 王 石明
〒615 京都市西京区北百川山元町2番地 親和荘7号 | [大阪西北R.C]
Tel. 075-702-2445 |
| 同志社大学
(経済学研究科) | 劉 美京
〒604 神戸市中央区港島中町2-4-2
神戸大学留学生会館 B501 | [京都山科R.C]
Tel. 078-302-3819 |
| 立命館大学
(経営学部) | Lee Kheng Tiong
〒604 京都市中京区西の京式部町43 | [京都西R.C]
Tel. 075-822-3148 |
| 奈良教育大学
(教育学研究科) | 蔡 貴華
〒630 奈良市三条町6064F | [奈良大宮R.C]
Tel. 0742-27-5820 |
| 奈良女子大学
(人間文化研究学) | 李 永熙
〒630 奈良市北小路町 奈良女子大学国際交流会館 | [平城R.C]
Tel. 0742-22-4409 |
| 天理大学
(外国語学部) | 曾 麗蓉
〒632 奈良県天理市川原白町651 ヤシマ女子寮 | [奈良R.C]
Tel. 07436-3-0828 |

《D-266》

- | | | |
|--------------------|---|--------------------------------|
| 大阪大学
(工学研究科) | 金 錫泰(韓国)
〒565 吹田市山田東町4-8-19 第3王子マンション503 | [豊中千里R.C]
Tel. 06-876-7043 |
| (文学研究科) | 李 幸禧(台湾)
〒563 池田市鉢塚2-12-9池田アパート16 | [大阪淀川R.C]
Tel. 0727-51-9335 |
| 大阪市立大学
(文学研究科) | 裴 貞烈
〒558 大阪市住吉区長居西1丁3-5-184 | [大阪鶴見R.C]
Tel. 06-692-7910 |
| 大阪教育大学
(教育学研究科) | 莊 淑嬪
〒562 箕面市大野原東4-24-29 ハイマウンド205号 | [堺R.C]
Tel. 0727-27-3127 |
| 関西大学
(文学研究科) | 莫 素微
〒564 吹田市山手町3-32-13 第3掻山女子学生寮307 | [箕面R.C]
Tel. 06-387-8821 |
| 《D-266》 | | |
| 神戸大学
(文学研究科) | 尹 美蘭
〒651 神戸市中央区筒井町3-1-22 サンハイム春日野201 | [泉大津R.C]
Tel. 078-261-3458 |

編集後記

「関西学友会」が発行している会報は発行回数を重ねるにつれ、その知名度が高まり、会の内外からの反応も予想以上のものであった。今回は、6、7合併号の性格から、質、量ともにより充実したものになるよう努めたつもりである。

今年度の役員の改正にともない、編集委員の数を増やし、様々な角度から意見を出し合い編集に臨んだ。6、7号の内容の特色としては、会員自身の研究内容についてのものが相当な数である。会員以外からの投稿もある、などが上げられる。今後もより内容を忠実にし、会報の性格を明確にしていくために、編集委員一同努力していきたい。

「校正」は一括して編集委員の妻 貞烈さんが担当してくれた。日本語の文章として構文的な誤りがあっても、原則的に内容には手を加えないで「てにをは」のみを訂正するようにした。

西宮ロータリークラブの市居嘉雄氏が、日本の文豪の「谷崎潤一郎」について書いて下さった。紙面を借りて感謝を申し上げたい。

会報6、7合併号は、大阪大淀ロータリークラブのいっさいの経済的援助によるものである。クラブの皆様には深く感謝を申し上げます。

編集委員代表

文 燕友

編集委員

魏 栢良 黄 承国

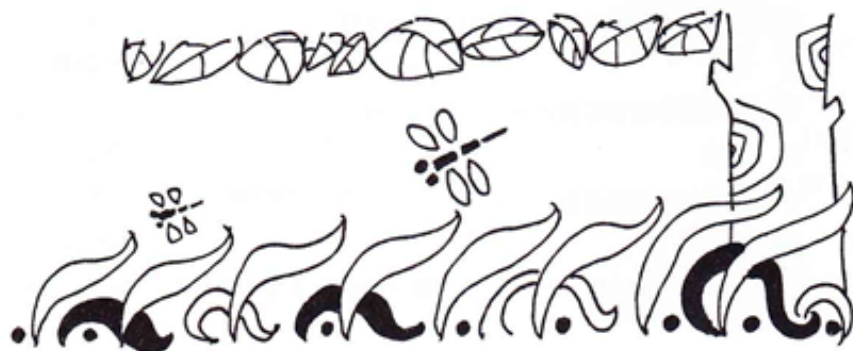
Sharma Ajay Kumar

Dileep Chandralal

大塚 賢龍 妻 貞烈

許 紫芬 千 文奉

文 燕友



許紫芬

米山奨学生学友会（関西）会報第6,7号

1990年12月1日 発行

発行者：米山奨学生学友会（関西）
〒567 大阪府茨木市新郡山1-12-302
魏 栢 良
TEL 0726-43-6158

印刷所：昭文堂印刷株式会社
〒531 大阪市北区豊崎2丁目11番8号
TEL 06-372-0071
FAX 06-372-4589



ROTARY
YONEYAMA
SCHOLARSHIP
ALUMNI
ASSOCIATION